

2019年度

文部科学省委託事業
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称:AG5)

エー
A ジー
G ファイブ
5 **だより集**

公益財団法人 海外子女教育振興財団

本冊子について

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そしてこのたび弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施する運びとなりました。

その成果発信の一環として弊財団で発行している月刊『海外子女教育』で2017年度は「日本人学校・補習授業校タマテバコ」という名称で連載し、2018年度からは「AG5だより」と名称を変え現在まで連載を続けております。連載では各テーマの研究の進捗状況や取り組みを紹介しています。本冊子では2019年度のものをまとめました。

弊財団では引き続き、「日本人学校におけるグローバル能力育成のためのプログラム開発」や「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」、「南米日本人コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発」などに向けて本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2021年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5事務局



在外教育施設の新しい取り組み—AG5プロジェクトの成果—

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG 5 = Advanced Global Five プロジェクト)を開始して2年が経過しようとしています。本欄では毎回、2018年度の取り組みを紹介してきましたが、改めてこの1年間のプロジェクトの成果を報告します。AG 5 ポータルサイト (<https://ag-5.jp>) もあわせてご覧ください。

教育の成果とは

この事業の成果をどのように把握するか、つまり評価についてまず説明します。みなさんは、評価の「工学的アプローチ」と「羅生門的アプローチ」という用語を聞いたことがあるでしょうか。J. M. アトキンという人が使い始めた言葉です。

「工学的アプローチ」とは、目標に基づいた評価を重視し、客観的な指標で行うことが目指されます。学力テストの結果などはその代表的なものです。これに対し「羅生門的アプローチ」とは、目標だけにとらわれない評価を重視します。定量的に見るだけでなく、教育の場でおきたさまざまなことを記述し、評価の材料に用います。例えば、レポートや感想文、日記などは客観的な指標では評価しにくいものです。また、異なる立場、複数の視点から評価していくことも必要です。「羅生門的アプローチ」の語源は、黒澤明監督の映画「羅生門」に由来するものです。

この映画では、複数の目撃者が全く異なる証言をし、真相は観客に探らせる、という手法がとられています。まさに多様な視点や方法での評価が必要だということを示しています。なぜこのような話をしたかという

と、このプロジェクトでの取り組みは、一元的で客観的な指標だけではとらえられないためです。それぞれがどのような試みをして、どのような成果が上がったかを多面的、かつ多様な方法でとらえていく必要があります。私たちは、(1) 学校全体で取り組んでいるか、(2) 教師の実践力の向上につながっているか、(3) 子どもの学習成果が向上しているか、そして、(4) その取り組みを通じたモデルカリキュラムやプログラムの開発ができたかといった観点から成果をとらえることにしました。ただ、このプロジェクトでは、やはり四番目の「他の学校でも実践可能なモデルカリキュラムやプログラムを示すこと」が一番の目標です。

グローバル型能力育成のための 教育支援—香港日本人学校香港校 小学部の取り組み—

香港日本人学校香港校小学部では二〇一六年度に四年生のみで「グローバルクラス」をスタートさせ、その後、五年生、六年生へと対象を広げてきました。このクラスの特徴は、算数と理科の授業を英語で行うこと、学校独自の「グローバルスタディーズ」(世界的な課題について学期に一つのトピックで探究型の学習をする

もの)を創り、そこで問題解決力、論理的思考力、表現力などの育成を目指すという点にあります。一八年度の取り組みと成果について、上記に挙げた「観点」に沿って報告します(以下、他校の取り組みにおいても同じ)。

(1) 日本人学校の先生の多くは二、三年のサイクルで異動します。「グローバルスタディーズ」は学校独自の科目であるため先生方の共通理解が必要です。そこで全校あげてカリキュラム開発に関する研究授業と研究協議会を行いました。AG 5 のメンバーが香港に赴いて研修を実施、共通理解を得るようにしました。

(2) 「グローバルクラス」は、国際バカロレアのPYP (Primary Years Programme) に準拠して構想したものです。授業の進め方、教材の作り方、評価方法など日本の教育とはやや異なるため、担当する先生方の研修は不可欠になります。そこで、日本国内の探究型学習や国際バカロレアを取り入れている東京学芸大学附属大泉小学校、ぐんま国際アカデミー初等部、東京学芸大学附属国際中等教育学校、聖ヨゼフ学園小学校などを訪問し、授業参観や国内の学校の先生方との話し合いの場を作り、グローバルクラスのカリキュラム開発、英語教育の向上、イメージョン

教育などの取り組みの参考になるような研修を実施しました。

(3) まず客観的な指標としては、グローバルクラスの子どもの学力テストの結果に注目します。標準学力検査であるCRT(Criterion Referenced Test)の五、六年生のグローバルクラスの結果は、国語、社会はもちろん、英語イマージョンで学習している算数と理科においても、全国テストの平均値より高い数値が得られました。また一七年度の一学期から三学期にかけて、グローバルクラスの四、五年生のほとんどの子どもの英語の読解力が向上しています。しかもアンケートの結果からも、英語の成長を実感している子どもが多くなっています。

(4) 「グローバルスタディーズ」のプログラムの改善と開発を共に行いました。例えば四年生の「限られた資源としての水」では、理科、算数、家庭科等との教科横断的な学びを取り入れたり、四年生で学んだ「多様性」についての概念を、五年生での「環境と持続可能な社会」において深める等、学年にまたがる単元構成、評価法、指導法の見直しを行いました。同時に、「グローバルスタディーズ」の単元の体系的を検証し、他の学校でも参考になるようにしました。

二つの言語能力を向上させるための支援—台北、台中、高雄日本人学校での取り組み—

台湾の三校の日本人学校には、国際結婚家庭の子どもが多く在籍しています。こうした子どもたちの中国語能力を活かしつつ、教科学習についていくための日本語能力を育成すること、二言語能力を持つ人材育成を図ることが取り組みの目標です。

(1) 台北日本人学校は小学部、二年生に焦点をあて、教科学習についていくための日本語力を向上させることを目指しています。台中日本人学校は一〜六年生を対象に、学校全体で日本語指導と教科指導を統合した授業改善に取り組んでいます。高雄日本人学校は現地校内で学校経営を行っていることを生かし、その現地校との語学指導を含めた交流のさらなる発展に力を注いでいます。

(2) 日本人学校での日本語指導は、指導経験がない先生が多く、手探りで取り組んでいるのが実情です。そこで一八年度も引き続き、国内内の学校での研修を実施しました。神奈川県横浜市と東京都豊島区の小学校では日本語の取り出し授業を参観、先生方との話し合いを通して個々の子どもへの指導の進め方につ

いて考えるきっかけにさせていただきました。

(3) 日本語力がどの程度向上したかを客観的に把握するまでにはいたっていません。ただ、子どもの日本語・中国語の語彙チェック、日本語力の測定をもとに、どのようなプログラムが適切かをこの二年間で検討してきました。子どもの実態がわからないまま指導したのではその効果も期待できません。そこで日本国内で開発された「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントD L A (Dialogic Language Assessment)」を活用しました。今後、開発したプログラムで実践を行い、日本語力がどの程度向上するかを検証していきます。

(4) 台北日本人学校の取り組みをもとにして、小学一〜二年生用の日本語補習授業用のプログラムを開発しました。台北日本人学校の実践をもとにしていますが、そこから一般化を図り他の日本人学校でも活用できるようにプログラムの開発を目指しています。台中日本人学校では、日本人学校の子どもがつまずきやすい単元について、指導計画と教師の支援策を示したものを作成しました。また高雄日本人学校では、現地校に日本語指導を行う際の日本語教材について改訂を行いました。

英語力と日本語力の向上を目指すための支援—ダラス補習授業校の取り組み—

ダラス補習授業校でのプログラム開発を継続しましたが、オースチン、クリーブランド、コロンバス(OH)、シカゴ、シンシナティ、セントルイス、ワシントンの各補習授業校とも協力して、プログラム開発と授業実践を進めました。

(1) ダラス補習授業校では学校あげて取り組んでいます。学年別に三つの部会で学習指導計画の作成を行っており、高等部ではシンシナティ補習授業校との交流授業を実施しました。

(2) もともとダラス補習授業校では熱心に研修を行っていましたが、このプロジェクトで研修にも拍車がかかりました。国内から担当するプロジェクトメンバーが赴き研修を開催しました。また八月には、「多様な児童生徒と一緒に楽しく日本語を学ぶ授業づくり」というテーマで、オースチン、シンシナティ、コロンバス(OH)の補習授業校の先生も交えて合同の研修会を実施しました。(3) 成果の評価について研修を行いました。補習授業校では、日本語での学習に意欲をもって参加するこ

と、学習した内容を日本語で発表できるようになることが大きな目標になります。発表内容について、「ルブリック」(学習の到達度を示す観点と尺度をあらわすもの)をもとにした評価を補習授業校でも行えるようにしました。各学年の取り組みからも、日本語が不得意な子どもたちも楽しく授業に参加し、調べ学習や発表活動に一生懸命取り組んでいる様子が保護者からも報告されています。

(4) 四年生では「写真と文で活動を伝えよう」、五年生では「一枚の写真から」、六年生では「未来をよりよくするために」という単元開発を行いました。子どもの思考力や想像力を高め、それを表現するという取り組みです。この学習指導案を公開し、他の補習授業校でも実践できるようにしました。また、高等部ではシンナティ補習授業校との交流授業をTV会議で行い、今後に向けて複数の補習授業校高等部での交流授業の可能性を検証できたように思います。

日本型教育・日本語教育の発信の取り組み—アスンシオン日本入学校の取り組み—

アスンシオン日本人学校では、日系人とそのコミュニティに対して、

日本語学習をはじめとする日本型教育や日本文化を発信する取り組みをこの二年間にわたり進めています。

(1) 新しい学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されています。社会に開かれることは、①学校が社会とのつながりを踏まえて目標を設定し、それを実現する教育課程を編成すること、②社会で生きていくために必要な資質・能力を育むこと、③地域のリソースを活用することがうたわれています。

これは日本人学校でも同様で、地域や国との関わりなしに効果的な教育は期待できません。改めて学校と共通理解を図り、学校全体で取り組んでいただくようにしたいと思います。

(2) アスンシオン日本人学校とアスンシオン日本語学校との合同研修会を実施しています。日本人学校の先生が勤務外で日本語学校の支援をするのは容易なことではありませんが、工夫して実施しています。また一八年度は、アスンシオン日本語学校とイグアス日本語学校から三名の先生方が日本の学校の研修に参加し、日本語指導、国語や体育の指導法などについて学びました。

(3) 日本語学校の子どもの日本語力が向上すること、日本文化への関心が高まること、日本との関わりが

強まることなどが指標になります。今年度は、日本語学校で「書道」を通した日本文化への関心を高める指導を行っていますが、残念ながら成果の評価までは行っていません。次年度の課題にしたいと思います。

(4) アスンシオン日本人学校において、「移住すごろく」の開発を行いました。日本人学校、日本語学校の両方で使える内容にしようと企画したものです。また一九年度には、日本人学校を中心に、日本語学校に通う日系人の子どもたちにも役立つ日系移民の歴史を織り込んだ社会科の副読本の開発を行う予定です。

日本文化等の発信の拠点形成の支援—西大和学園カリフォルニア校の取り組み—

西大和学園カリフォルニア校での取り組みは、学校図書館を日本文化や日本語の学習の場にして多様な活動を行うことで、親日的な人材を育成することがねらいです。前述の四つの取り組みと異なり、親日的な人材育成を目的としており、どの程度、学校のリソースを開放できているかが成果になります。一八年度は、まずは現地の交流校であるキャンベル・ホール・スクールの子どもの日本文化の理解の深まりを図るために、琴

などの和楽器の演奏やお茶の披露などを行いました。つぎに、現地の人や保護者などに日本映画の上映会を開催し、関連する資料を提供しました。さらに現地の中学生が日系人の歴史を学ぶ資料がないため、全米日系人博物館、GoDoke National Education Center、リトル東京サードビルと連携し、日英バイリンガルの教材の開発に着手しました。その他、近隣で日本語を教えているハイスクールの実態を調査し、日本語教育に関してどのような支援が必要かのニーズを把握しました。その結果に基づき、今後、必要な資料や情報を提供していく予定です。

今年度の取り組みに向けて

一八年度の成果についてはAG5のポータルサイトをご覧ください。一九年度は、香港日本人学校の取り組みはシンガポールやパリの日本人学校に、台湾で行ってきた日本語指導については青島、大連やマニラの日本人学校に広げていく予定です。補習授業校の取り組みはダラスを中心に広げていくほか、ロサンゼルス補習授業校高等部の支援も新たに考えています。

詳細は一九年度の本欄で紹介していきますので、ぜひご期待ください。

エー A G 5 だより

香港日本人学校グローバルクラスの取り組み —グローバルスタディーズの授業の実際—

AG5運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談室長 植野美穂

今年の3月、香港日本人学校小学部では、グローバルクラスから初の卒業生を送り出しました。4年生でのスタート時は13名、その後、数名の帰国・編入を経て12名が卒業しました。彼らはグローバルクラスで、英語の授業、算数と理科の英語イメージング授業、グローバルスタディーズ(トピックに合わせて日英言語を使い分ける学習)を通して、英語の運用能力や課題解決力、グローバル市民としての主体性を身につけることができました。このような資質・能力を取得するために、どんな学びを行ってきたのでしょうか。6年生のグローバルスタディーズに焦点を当てて紹介します。



グローバルクラス初の卒業生

下記の二枚の写真は、今年の卒業生が6年生のグローバルスタディーズで最後に取り組んだ自由研究の発表風景です。

右の写真にはパネルを展示した教室が、左の写真にはブースごとに発表している様子が写っています。

子どもたちはグローバルスタディーズで、世界的な課題について探究することにより、次のような能力や姿勢を身につけることができました。

- ・課題解決力(「調査力」「分析力」「討論力」「プレゼンテーション力」など)
- ・探究心に満ち、前向きに学ぼうとする姿勢

- ・未知のことに対して、学習したことや自分の体験に基づいて自分なりに解決しようとする姿勢
- ・自分の主張だけでなく、他人の考えも興味を持って受け入れようとする姿勢

グローバルスタディーズの学び

グローバルスタディーズでは、一学期に一つのテーマ、三学年を通して八つのテーマ(本誌二〇一八年十二月号「AG5だより」参照)について探究活動を行い、六年生の三学期には自由研究の発表を行います。



自由研究の展示



ブースでの発表

今年の卒業生がそれぞれ、自由研究で選んだテーマを紹介します。

- ・延命治療
- ・ドラッグ(医療用薬物)
- ・スマートフォンを使い捨て
- ・マイクロプラスチック
- ・死刑制度
- ・バイオテクノロジーと農業
- ・防犯とプライバシー
- ・フェアトレードと人権
- ・キャッシュレス決済
- ・交通×労働×環境
- ・AI 人工知能
- ・エコテロリズム

この自由研究では、実際の生活での課題や問題の中で、自分が探究したいと思うテーマを設定し、そのテーマに関する調査設問(Ines of inquiry)を決め、実際に調査を行い、解決策を提案することが求められます。

グローバルスタディーズを担当した大澤由恵先生は、自由研究の発表までに、子どもたちにどのような働きかけを行ったのでしょうか。

自由研究発表の指導の実際

研究テーマは各自異なるものですが、テーマとそのテーマに対する調査設問を作る際には、グループのメンバー間で議論をしっかりと交わす時間を設けました。

また全ての子どもにReport formatを配付し、一、二週間ごとに提出させ、個々の研究の進捗状態を確認しました。授業では、子どもたちがそれぞれ個人作業を行う傍ら、一人ひとりと面談し、子どもたち自ら考えを深めるための質問を投げかけました。

六年生の三学期は、中学受験で帰国する子どもが多いので、授業を継続させるためにオンライン教育プラットフォームであるUdmojoを活用しました。教師の側から、役に立ちそうなウェブサイトを映像をアップしたり、メッセージ機能を用いて個々の子どもからの質問を受けつけたりもしました。また、児童の側からも「○○についてどう思う?」といった質問を投稿してもらい、グローバルクラスの子も同士で意見を交換することができました。

子どものReport formatを見ると、いつどのような調査やインタビューをして、自分の考えを深めていったのか、探究活動のプロセスを読み取ることができそうです。

自由研究で延命治療をテーマとした子どもは、

Q1 延命治療とは何か。

Q2 QOLとは何か。

Q3 なぜ延命治療がsaveなのか。

Q4 なぜ患者の意思とは関係なし

に延命治療は行われるのか。そもそも延命治療は誰のためなのか。

Q5 どのような意見があるのか。

Q6 どうすれば解決できるのか。を研究テーマに対する調査設問としました。

Q5では、日本人学校の六年生や中学生、先生、さらに医師である親戚にインタビューし、患者の家族の立場に立った意見と医師サイドの意見をまとめ、Q6ではこのテーマに対する自分の考えを伝えていきます。

グローバルクラスでは、学年が上がるにつれて「多角的に考え、それを自分で認知することができる子」を目指しています。自由研究発表は、これまでグローバルクラスで過ごす中で身につけた学習者像を体现するよい機会となりました。

グローバルスタディーズの授業

グローバルスタディーズは、国際バカロレアPYPの「探究の単元」(Unit of Inquiry)を参考に、週三時間行います。社会科学から週一時間抽出しているため、社会科学の単元との結びつきを強く持っています。社会科学以外の教科の指導内容とも関連させながら、教科で身につける知識や技能が活用できる総合的な学習となっています。



話し合いながら発表の準備

グローバルスタディーズには教科書がありません。そのため、大澤先生は授業を組み立てる上で探究に役立ち、子どもたちも興味を持ちそうなデータやトピックを、政府、国際機関、NGOが発信するサイトをはじめ、本、DVD等さまざまなところから集める努力を積み重ねました。六年生で探究するテーマは、一学期は「紛争と平和構築」、二学期は「ガバナンスと人々のくらし」です。

一学期の「紛争と平和構築」は、社会科学前期に学ぶ歴史の内容と大きく関わりますが、後期の学習内容の政治とくらし、世界の国とのつながりにも関係しています。「ガバナンスと人々のくらし」は、社会科学の政

治、法の制定、権利尊重、国際協力や援助といった後期の学習に関連するテーマです。

「紛争と平和構築」では、紛争は国や地域間での武力紛争だけではなく、クラスやコミュニティといった身近にもあることに気づかせます。紛争の原因と結果、その後の影響について分析し、当事者意識を持って紛争解決にあたり、最終的には「紛争は人々と社会にどのような影響を与えるか? 平和構築のために何ができるか?」について自分の意見をもち、学んだことを発信します。

このテーマでも他のテーマと同様に探究サイクル(本誌二〇一八年十二月号「AG5だより」参照)にそって探究活動を進め、PYPが掲げる八つの概念(このテーマでは因果関係、責任、見方、ふり返り)について、協働学習を通して理解を深めていきます。

また、校外学習(香港の歴史博物館見学、沖縄修学旅行)での具体的な体験や事物との関わりによる学びで、課題についての理解を深めるほか、「世界一大きな授業」(教育の大切さを考える世界一〇〇カ国で一斉に行われるイベント)に参加し、香港日本人学校グローバルクラスとして「私たちの政策提言」を発信しま

した。

「ガバナンスと人々の暮らし」では、ガバナンス（統治・管理・支配）は大人の世界・政治の世界という意識を持ってしまいがちですが、ガバナンスは家族・クラス・学校といった身近なコミュニケーションにもあり、教育や交通といった分野ごとにも議論されるものです。また、ガバナンスに不公平感、差別が見られると、それは紛争につながります。このテーマでは、政府のさまざまな形態や機能について理解し、ガバナンスと人々の暮らしにはどのようなつながりがあるか、よりよいガバナンスのためにどのように貢献できるかを考え、行動できるようにすることを狙っています。

子どもたちは「ガバメント＝政府」ということは知っていますが、「ガバナンス」という言葉は初めて聞くようで、最初「？」という反応を見せました。このテーマでは、はじめに香港の立法議会に見学に出かけ、そこで立法議会の主な三つの働きが①法をつくること、②予算を承認すること、③政府を監視すること、だと学びました。

校外学習での学びから、授業では「政府を監視するというけれど、立法議会は自分で自分を監視している

の？」「立法議会と政府は何が違うの？」と質問を投げかけ、政府やガバナンスという概念を自分たちで作った探究活動を行いました。

卒業生の保護者からのコメント

十二名の卒業生のうち、四名が帰国して希望の中高一貫校等へ、八名が日本人学校中学部へ進学します。卒業生の保護者たちはグローバルクラスでの学びについてどのように思っているのでしょうか。寄せられたコメントを紹介します。

・プレゼンテーションがたくさんあるので、物事を考えたり、リサーチしたり、人に伝えるときにわかりやすく解説したりすることができるとなったと思います。また、香港の立法議会を見学することで、普段考えなかったような香港の立法について考えることができたり知ることができたりしたことはよい経験になったのではないでしょう。

・グローバルクラスに入った当時、英語は決して得意とはいえない子でしたが、生来の積極性と先生方のご指導をもって英語に対して物怖じしない子に成長したと思います。これは得がたい財産ですので、

帰国後も忘れずにいてくれたらと思います。

・グローバルクラスは独立性が高いので、一般のクラスの子どもたちと友達感覚を共有できたかどうか、傍目には若干不安に感じました。たとえば、日本語の科目はほかの一般のクラスと合同にする等も一案かもしれません。

・外国の文化や多様性の問題など、違った方面に関心を持つようになってきましたし、英語への理解度は大きく向上したように思います。セルフマネージメントやスケジューリングの力も身についたように感じています。中学部に進学してからも、ここで培った力を伸ばしていくってほしいです。

中学部での取り組みは？

小学部のグローバルスタディーズでは探究活動を通して、物事を大局的に捉える概念を学び、テーマ同士のつながりを分析する見方を育ててきました。

中学部では、グローバルクラスの卒業生の受け皿として、今年度は英語の授業の中でグローバルスタディーズを組み入れていきます。年齢が上がるにつれて、概念についての理解も深まるため、今後の中学部での

グローバルスタディーズが期待されます。

他校への広がり

前月号「AG5だより」で、AG5運営指導委員会の佐藤郡衛委員長が二〇一九年度は、香港日本人学校の取り組みはシンガポールやパリの日本人学校に広がっていく予定です」と述べました。香港日本人学校のグローバルクラスでの取り組みを参考に、他の日本人学校がそれぞれの国や地域の特色を生かした探究活動を授業に取り入れ、グローバル型能力を身につけた子どもたちが多くの日本人学校から育っていくことを願っています。



授業風景

「補習授業校の子どもたちの特性」

日本国内の子どもたちの学習・生活状況等との比較から見えてきた姿

— 『補習授業校児童生徒の学習状況調査等報告書』より —

AG5運営指導委員会

昨年、AG5（在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業）ではアメリカの補習授業校に在籍する児童生徒を対象に「補習授業校児童生徒に対する学習状況調査」を行い、49校・3,829人から回答を得ました。2018年7月号の本欄ではその結果の一部を報告しましたが、今回は学習や生活状況について日本国内の子どもたちと比べて違いが見られたおもなものについて紹介します。

調査の概要

本調査（「補習授業校児童生徒に対する学習状況調査」）においては日本国内の子どもたちの学習・生活状況等との比較を行うため、九十七におよぶ設問のうち、六十六項目は、二〇一七年度に国立教育政策研究所が実施した「全国学力・学習状況調査」の設問と同一のものになっています（一部、文言を補習授業校用に調整したものも含みます）。

日本国内の調査が小学六年生と中学三年生を対象としているため、補習授業校における調査・分析に関しても同じ学年を取り上げて分析しました。調査対象の人数は、日本国内と補習授業校とで、左記の通り大きな差があるため、一概に統計的な検証はできませんが、それぞれの傾向や特徴を知る目安にはなり得るのではないのでしょうか。

なお、調査対象者については次の通りです。

●調査対象者

（日本国内）

小学六年生…一〇二万二一〇三人
中学三年生…一〇二万三八一七人
（補習授業校）

小学六年生…八四〇人
中学三年生…三九三人

調査結果の概要

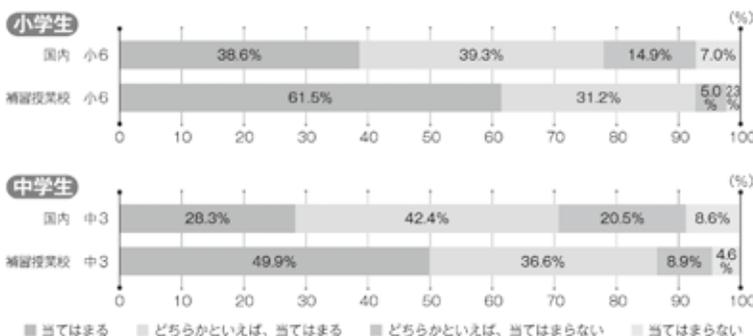
詳細は後述しますが、補習授業校に通う子どもたちの際立った特性を挙げれば、学習面においては、まず「自己肯定感が高いこと」です。この感覚を持てると、自分を尊重するように他者や周りも尊重でき、お互いに尊重し合える関係が築けます。人が生きていくうえで土台となる大切なものです。

次の特性は、「自分の考えや意見を発表するのが得意と考えている子どもが多いこと」です。自分の気持ちを周りに正しく伝えられる人は他人に対して失礼な態度を取ることなく、自分の権利も守りながら、意見の違いや対立をうまく解決させることができるといわれます。

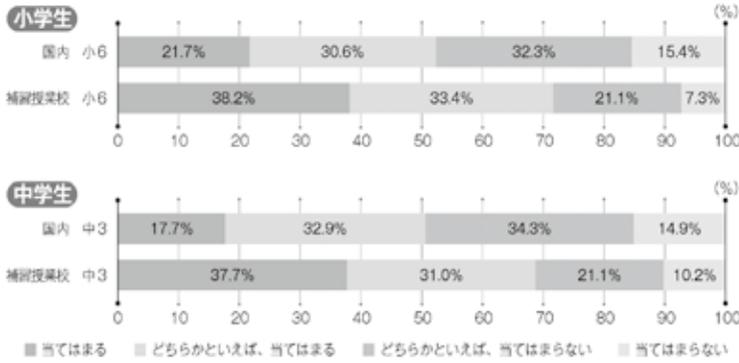
他方、生活面においては、「テレビゲームをしている時間が日本国内の子どもたちより短いこと」が挙げられます。日本がゲーム大国であり、日本国内の子どもたちがゲームに依存し過ぎている傾向がうかがえます。日常的にテレビゲームを長時間すると、視力や体力のほか社会適応の面で問題が出てくるともいわれています。補習授業校に通う子どもたちは日本国内の子どもたちよりも恵まれた環境にあるといえるのかもしれませんが。

（1）「自分にはよいところがあると思う」

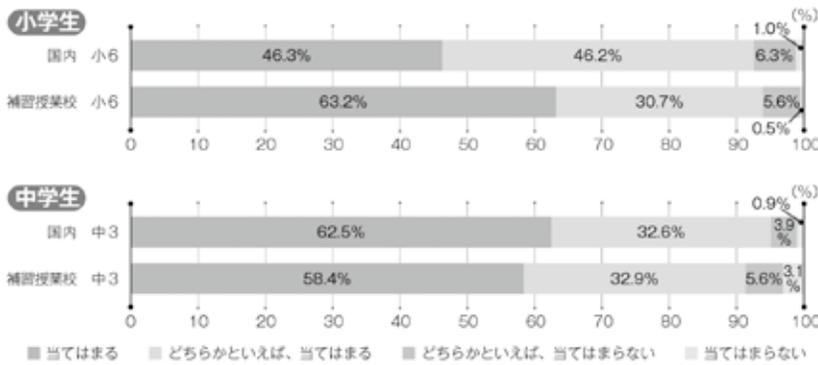
「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えたのは、小六・中三ともに「補習授業校」が「日本国内」を大きく上回りました。補習授業校に通う子どもたちの方が自分のよさを明確に自覚していて、自己肯定感を高く持っていることがうかがえます。



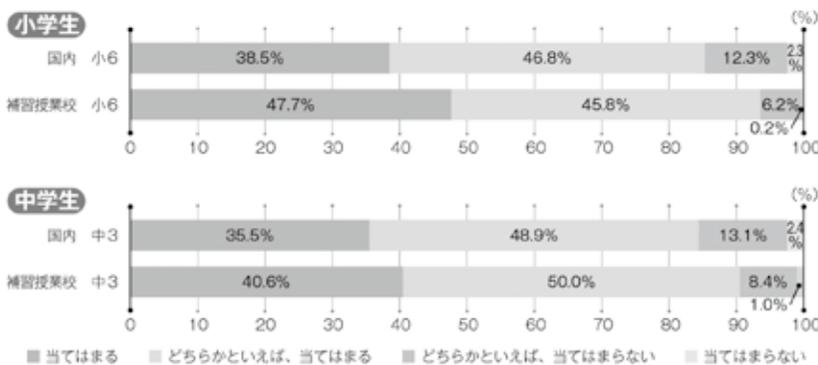
(2)「友達の前で自分の考えや意見を発表するのは得意だ」
 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えたのは、小六・中三ともに「補習授業校」が「日本国内」を大きく上回りました。補習授業校に通う子どもたちの方が普段通う現地の影響か、考えや意見を発表することを得意と考えているようです。



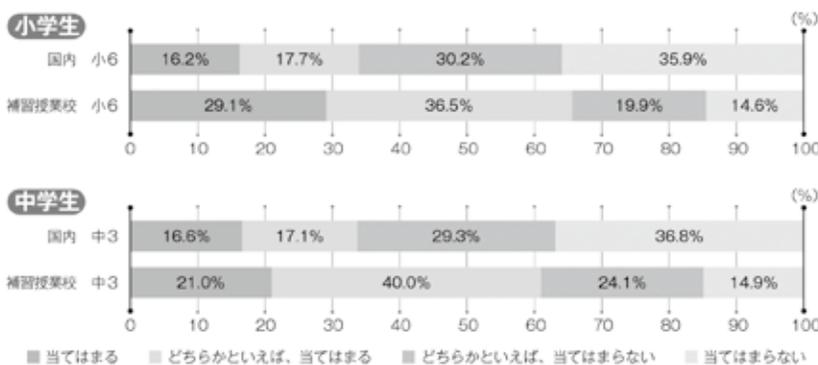
(3)「学校の決まりを守っている」
 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」としたのは小六では「補習授業校」が「日本国内」を上回りましたが、中三では逆の結果になりました。日本の中学校の校則の厳しさを髣髴とさせる結果といえます。



(4)「人が困っている時は、進んで助けている」
 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」としたのは小六・中三ともに「補習授業校」が「日本国内」を上回りました。



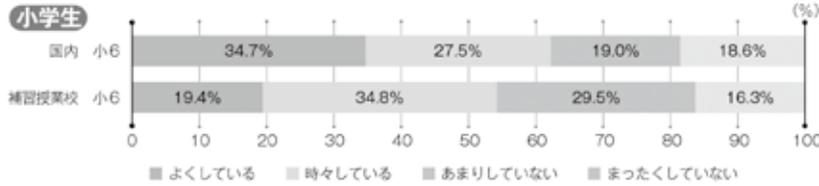
(5)「将来、日本以外の国で仕事をしたい」
 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」としたのは小六・中三ともに「補習授業校」が「日本国内」を大きく上回りました。



(6)「今住んでいる地域の行事に参加していますか」

小六のみで大きな差異が見られました。

「よくしている」という回答は「日本国内」が「補習授業校」を上回りました。日本では地元のお祭りやスポーツ大会、小学校の学校行事など地域ぐるみで行われるイベントが多いのが要因でしょう。

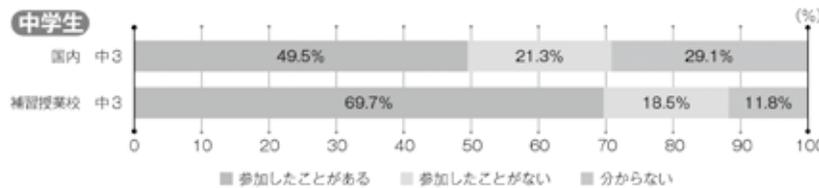


日本では、地元の子ども会や町内会主催のイベントが結構あるようです。

(7)「地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか」

中三のみで大きな差異が見られました。

「参加したことがある」という回答は「補習授業校」が「日本国内」を大きく上回りました。「日本国内」では「わからない」という回答も三割あり、ボランティアそのものに馴染みが薄いことがうかがえます。

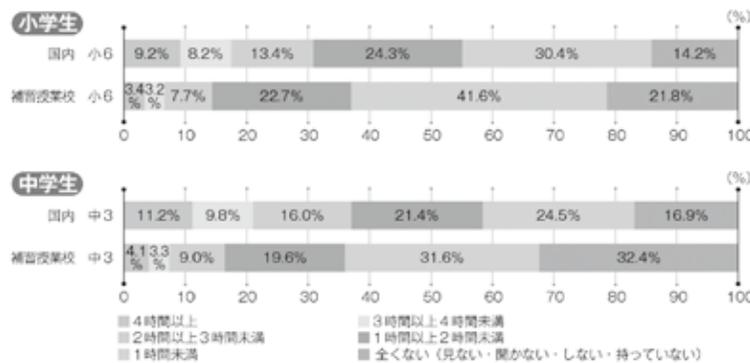
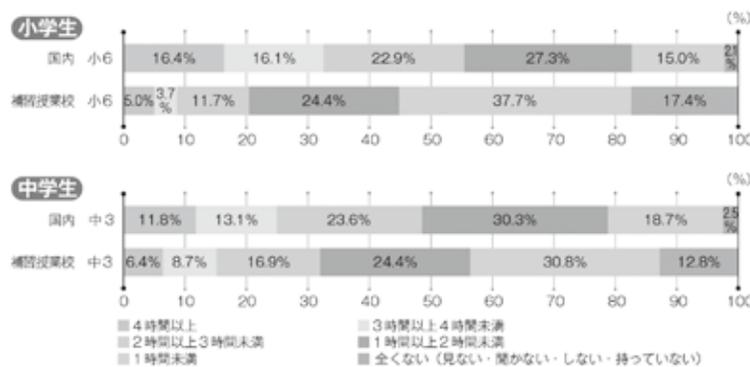


2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を機に、日本でも「ボランティア」が浸透することが期待されています。

(8)「普段、一日当たりどれくらいの時間、日本語のテレビやVD、動画サイトなどを見たりますか」

小六・中三ともに、「日本国内」の方が「補習授業校」を大きく上回りました。「補習授業校」の中には英語が第一言語で日本のコンテンツを全く利用しない子どもたちも含まれているように思われます。

小六・中三ともに、「日本国内」の方が「補習授業校」よりテレビゲームをしている時間は長いようです。「補習授業校」では「全くない」という回答も多く見られました。



(9)「普段、一日当たりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか」

小六・中三ともに、「日本国内」の方が「補習授業校」よりテレビゲームをしている時間は長いようです。「補習授業校」では「全くない」という回答も多く見られました。

エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の新たな挑戦に向けて—2019年度のAG5の取り組み

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG5 (Advanced Global Five) プロジェクト)を開始して3年目を迎えました。2019年度の取り組みの大きな特徴は、これまでの2年間の成果を踏まえて新たな学校への支援を行うことです。今回は今年度の取り組みについてご紹介します。

AG5プロジェクトの基本的な視点

この事業を行う上での基本的な視点を確認しておきます。私たちが大切だと考えているのは次の二点です。

第一は、各学校のニーズと実態にあつた支援策を共に考えることです。これまでの取り組みも、例えば香港日本人学校は当時の運営委員会からの「子供の数の減少への対応として、選ばれる学校づくりができないか」という要望から始まったものです。

台湾の日本人学校では、国際結婚家庭の子供の増加に伴い、日本語教育が課題でした。こうした子供には高い中国語能力があります。そこで、中国語と日本語の両言語の力を伸ばすための取り組みを開始しました。

ダラス補習授業校でも、永住者や国際結婚家庭の増加と共に、英語を第一言語とする子供が多くなり、日本語教育が課題でした。英語力も日本語力も多様な子供同士が共に学べる教育を構想するためにプロジェクトがスタートしました。

アスンシオン日本人学校では、パラグアイの日系移民に日本の文化や教育を発信するための企画を行いました。日本人学校を日系人に対する日本の教育の発信拠点として整備し、それが日本人学校の経営や実践にも

プラスになるというものです。

西大和学園カリフォルニア校は、学校にある図書館を活用することで現地の交流校や現地の人に対して日本文化や情報を提供することを目指したものです。このように、この事業は各学校のニーズや実態に対応して取り組んできました。

第二は、在外教育施設の将来像を描けるものを共につくりあげることです。日本人学校や補習授業校は、それぞれ多様性に富み、各校違っています。その成果は、工夫如何で他校でも実践可能なものになります。"good practice"という言葉を使い、たことがあるでしょうか。いい実践に注目し、その実践から学んでいくという考え方です。この二年間にやってきた各校の取り組みは、good practiceであり、他校でも十分に参考になるものです。

例えば、香港日本人学校の「グローバルスタディーズ」(以下GS)のカリキュラム開発は、目標・内容構成・教材・学習活動・評価などのポイントを明確にすることで、他校でも実践が可能です。また、在外教育施設は先生の任期が二〜三年と限られていますし、運営委員の任期もほぼ同じようなものです。したがって、同じ学校の取り組みでも先生や運営

委員が代わると継続しないといった問題を抱えています。このプロジェクトでは継続性を担保するために、管理職を含めた先生方はもちろんですが、できるだけ多くの運営委員の皆さんにも極力関わっていただくようにしました。さらに、次に挙げる継続可能なプログラムを開発することで実践の継続性も意識しました。

今年度はそれを水平展開し、新しい学校での取り組みも始めますが、こうした視点で進めていきます。

(1) 日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

これまで香港日本人学校香港校小学部でグローバルな能力を育成するための実践に取り組んできました。広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材を育成することが目的です。小学四年生から「グローバルクラス」を開設し、独自のカリキュラム開発を進め、今後の日本人学校の教育の方向性が見えてきました。成果については本欄で報告済みですが、他の日本人学校でも実践可能なのは新設教科のGSです。

GSは探究学習をもとに調査力、分析力、論理力、プレゼン力などの能力を高めること、国際的な問題や課題を扱うことでグローバル市民の育成を図ることを目標としています。その探究のサイクル学習活動の流れは次の六段階です。①課題の背景や基礎的な知識に触れるステージ、②知識や情報を調査から得るステージ、③身につけた知識や調査で得た情報を整理するステージ、④自分の学びを振り返り、さらなる調査を進めるステージ、⑤単元での学びから自分の結論を出すステージ、⑥自分の学びをコミュニティに還元すべく行動するステージ。こうしたプロセスを明確にすることで、他の学校での実践の参考になります。

今年度はシンガポール日本人学校とパリ日本人学校で新たな取り組みとして、広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力を育成するための「探究科」の単元の開発と実践を行います。シンガポール日本人学校ではESD(持続可能な開発のための教育)を中心に小学部で「探究科基礎」という実践を行っています。パリ日本人学校でも「水」をテーマに探究学習を行うことになっています。各校でのニーズがあれば「探究科」で英

語力を向上させる取り組みも行っていきます。三校の実践から二〇二〇年度には「探究科」の目標、内容構成、教材、学習活動、評価などを明確にし、他の日本人学校でも実践可能なモデルを構築する予定です。

(2) 日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

台湾の日本人学校には国際結婚家庭の子供が多く在籍しています。一八年度は、台北日本人学校の小学一・二年生を対象とした日本語補習プログラムと台中日本人学校のJSLカリキュラムの視点を取り入れた在籍クラスでの教科指導計画案を開発しました。また、高雄日本人学校を含めた台湾の三校で日本語指導に関する研修を行い、先生方の日本語教育の指導力の向上を図りました。

台北日本人学校は放課後に週一回三十分の日本語補習を行っています。そのための二十回分のプログラムを開発しました。一年生では「えをみてはなそう(国語)」「どこに何があるかを文レベルで話す」、「なんばんめ(算数)」「何番目、何人目などがどれを指すかを確認する」、「くちばし(国語)」「問と答えのセット

がわかる)」、「がっこうのこと1(生活)」「どこに何があるか、語彙」、「がっこうのこと2(生活)」「どこに何があるか、どこで誰が何をしていたかが言える)など教科と関連づけた二十の単元を示しました。単元ごとに、「日本語補習の目標」「指導のポイント・留意点」「日本語指導経験がない教師に向けたアドバイスなど」、「指導したい語彙・文型」、「具体の展開例」が示されています。

台中日本人学校では授業の中でどのような日本語の支援が効果的かを提案しました。例えば、各教科で難しい言葉、理解が困難と思われる言葉を他の言葉に置きかえるなどの支援策を示しました。この二つの学校の成果を今年度中にまとめて刊行することになっています。

今年度は台湾の日本人学校の成果を踏まえて、マニラ・大連・青島の日本人学校で日本語教育の取り組みを開始します。マニラでは、国際結婚家庭の子供に対して日本語指導を行っています。より質を高めていくことが課題になっています。そこで、台北日本人学校の取り出し型の日本語指導プログラムを参考にして日本語教育の実践を行うと共に、それをもとにプログラム開発を行います。青島と大連では、台中日本人学

校が行ってきた在籍学級における日本語指導プログラムを参考にして、学校の実態にあった教科の日本語指導プログラムの開発を行います。まずはマニラ・大連・青島の三校とも日本語支援が必要な子供の状況を調査し、その日本語力を把握した上で、それぞれの実態にあわせたプログラムの開発に取り組んでいく予定です。

(3) 補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

ダラス補習授業校を対象にしたプロジェクトはこの二年間で大きな成果がありました。少ない授業日数で、日本語力に大きな差がある子供を対象にした日本語教育をどう実践するかを考えてきました。生徒たちは平日は現地校に通っており、英語力が優位な子供も多くいます。そうした中、日本語力を向上させることでバイリンガル・バイカルチュラルな人材を育成しようという取り組みです。日本語力の違う子供たちが共に学べる単元開発を行い、日本語で考え、発表するという学習を行って調べ、発表する」という学習を行ってきました。この実践を通して「日本語で考える力」「発表する力」が大きく向上することがわかりました。

一八年度はダラス補習授業校で、オースチン・クリーブランド・コロバスOH・シカゴ・シンシナティ・セントルイス・ワシントンDCなどの補習授業校の協力のもとに小学校高学年の単元開発を行いました。また、TV会議でその実践した内容や方法について相互に検討する取り組みを行ってきました。

今年度は、ダラス補習授業校での単元開発を小学校全学年と中学校に広げると共に、実践を共有するための参加校を増やし、補習授業校コンソーシアムの構築を目指します。補習授業校の力量のある先生方のネットワークをつくり、相互に課題を解決できるようにしていきます。

(4) 南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

パラグアイの日系人コミュニティに対して日本人学校がどのような役割を果たせるか、果たすべきかについて、具体の取り組みを通して検討してきました。アスンシオン日本人学校に、アスンシオン日本語学校の教師を対象にした国語指導に関する研修会を行っていただきました。ま

た一八年度には「移住すころく」を開発しました。これは日本語学校でも使えるものです。パラグアイの日系移民は南米では比較的歴史が浅く、今後二世や三世の方が増えるにつれ日本人としてアイデンティティをいかに保持するかが課題になっていきます。日本人学校はその意味では日本を象徴する存在で、日本の文化、教育、さらに日本語教育などの発信拠点を目指すことが期待されています。

今年度も引き続き、こうした取り組みを継続的に行います。新たな取り組みとしては、アスンシオン日本人学校の小学三・四年生用の副読本の改訂です。新学習指導要領に準拠して行いますが、この副読本をアスンシオン日本語学校での日本語教材としても活用できるように開発する予定です。日系人の歴史や日本との結びつきなどの内容も入れ、日系人・日本人としてのアイデンティティ形成の一助にしたいと思います。

(5) 学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発

西大和学園カリフォルニア校の取り組みは、学校図書館を地域に開放し、そこで多様な活動を行い、親日的な人材を育成することを目指しています。この二年間の成果の第一は、

日本文化を発信するためのイベントの開催とそれに関連する図書等の提供です。日本の図書や資料を現地の学校や住民に貸し出そうにも興味関心がない限り手にとってもらえません。一八年度はまず、日本文化を発信するイベントを企画・開催し、それにあわせて関連する図書や資料を提供しました。また、南カリフォルニア大学に本を貸し出し、そこで読み聞かせをするといった「移動図書館」などもユニークな取り組みです。

第二は、近隣の学区で日本語を第二言語として指導している小中学校や高校をリストアップしてアンケートを実施し、その結果からどんな支援が必要かを検討しました。

第三は二〇年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに関連する資料を収集したほか、日系人の歴史について中学生が学習するための資料を全米日系人博物館の協力を得て整備しました。

このプロジェクトの目標は「親日的な人材養成」です。どの程度、学校のリソースを開放し、それにアクセスしたかが評価の基準になります。一八年度はイベントを十回開催し、全体で三二六名の外部者が参加して活動が行われました。今年度も引き続きこの支援を継続していきます。

(6) ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発

このプロジェクトは今年度から開始します。日本人学校の教育の質を高めることを目的に、近隣の日本人学校と連携して、遠隔操作による教師研修や合同授業を実施する予定です。日本人学校は、小規模校が多く、子供同士での多様な意見交換やすべての教科において専門性の高い教師による指導を行うという点では課題があります。これを大規模な日本人学校、あるいは複数の日本人学校とICTを使って結びことで解決しようという取り組みです。

中南米の日本人学校で実践していきますが、今年度はICTを活用した遠隔での教師研修及び交流授業を実施し、子供や保護者、教職員へのアンケートなどによる評価を行う課題点を出し、二〇年度に本格的な取り組みを行う予定です。

以上が今年度の計画です。AG5プロジェクトは三年目を迎え、新たな学校を加えて支援事業を展開していきます。随時、本欄「AG5だより」やポータルサイトで報告していきますので、是非ご覧ください。

エー
A ジー
G5 ファイブ
だよ

台北日本人学校における日本語補習プログラムの開発

AG5運営指導委員・東京学芸大学国際教育センター准教授 見世 千賀子



台湾チームでは、2018年度、台北日本人学校の先生方と日本国内の小学校で外国人児童の日本語指導に携わってこられた先生方の協力を得て、小学校1・2年生を対象にした日本語補習プログラムを開発しました。このたび、「日本語補習授業の活動案集」としてまとめましたので、その概要と使い方について紹介します。

はじめに

日本人学校にも、国内の学校と同様に、日本語指導が必要な子供の在籍が増えてきていますが、その多くは国際結婚家庭の子供達です。

国際結婚家庭では、家庭によって言語使用の状況が異なりますが、父親が日本人の場合、就学前の子供は母方の言語に触れる機会が多いことが予想されます。使用する言語が、就学前と就学後、そして家庭と学校とで異なる場合、学校生活や学習のいろいろな場面で、子供達に困難が生じる可能性があります。

しかし、幼少期から日本語にも触れて育ってきている国際結婚家庭の子供は、適切な日本語の支援を行うことで、日本語での学習に十分に参加でき、日本語の力を伸ばしていくことが可能になります。

そのためには、具体的かつ計画的な支援が必要です。その方法の一つとして、台北日本人学校では「日語補習(日本語補習)」を、週一回、放課後に三十五分間、年間約三十回行っています。

では、その短くも貴重な時間に、優先的にすべきことは何でしょうか。それは、少人数の子供達と教師がたくさんやり取りしながら、個々の子供の日本語の力を把握する(できる

こと・できないこと、知っていること・知らないこと等を確認する)ことと、この先一週間の学習に参加するための日本語の力をできるだけつけることです。

今回、開発したプログラムは、日本人学校に通う日本語以外の言語背景を持つ子供達が、在籍クラスの学習活動に参加するための日本語の力をつけることを目的としています。

台北日本人学校で行われている「日語補習」をベースに作成していますが、広く世界の日本人学校に在籍している日本語指導が必要な子供達に対して汎用的に使用することを想定しています。

プログラムの概要と使い方

プログラムは、主に、国語、算数、生活科に関わる約二十回分の活動案で構成されています。取り上げている内容は、在籍学級での学びの基礎となる部分で、日本人学校で使用する教科書の単元の配置にそって配列しています(次ページ「日本語補習プログラム小学校2年生」の表を参照)。

日本語の課題は、子供によって異なります。この活動案の順番通りにすべてを行う必要は必ずしもありません。不要な部分は割愛してください。ただしその際、子供達は「知っ

ているはず」「できるはず」と想像で判断するのではなく、「知っているか」「できるか」は、子供との実際のやり取りを通して確認してください。また逆に、各学校の行事等の事前指導や独自の学習活動を加えていただくことも想定しています。

次に、活動案のポイントを紹介いたします。

時間の設定

活動案は、二十分程度で実施できるように組んでいます。先に述べた通り、このプログラムは台北の「日語補習」を基にしています。一回三十五分で、授業の前後にアイスブレイクや連絡事項の伝達などの時間も必要であることを想定しています。

授業の位置づけ

活動案は、在籍クラスでの学習活動に参加するための補充型指導をイメージして作成しています。

そのため、活動案の多くは在籍クラスでの授業に「先行」する形で組んでいます。「先行学習」を中心に据えることで、そこで身に付けた日本語の力を持って在籍クラスでの授業に参加し、「わかった」「できた」という達成感や自己有用感を味わってほしいと思います。

日本語補習プログラム 小学校2年生

| | 教科・単元 | 補習の目的 |
|----|---------------------------|------------------------------------|
| 1 | たんぼのちえ (国語) | 時間 (朝になると、2、3日経つと)、様子を読み取る、理由 |
| 2 | かんさつ名人になろう1 (国語・生活) | 観点：形、手ざわり、色、大きさなどの言い方を知る |
| 3 | かんさつ名人になろう2 (国語・生活) | (生活科と関連させ) 文で表現できる |
| 4 | ひっ算1 (算数) | 位がわかる |
| 5 | ひっ算2 (算数) | 計算の仕方 (1の位から10の位へ) |
| 6 | スイミー1 (国語) | 比喩 |
| 7 | スイミー2 (国語) | 行動から気持ちが読み取れる |
| 8 | 主語・述語 (国語) | 主語・述語の意味がわかる、探せる |
| 9 | 九九 (算数) | 「1あたり」「いくつつ」の意味がわかり、かけ算の概念がわかる |
| 10 | しかけカードの作り方 (国語) | 順序の言葉 (まず、つぎに……)、作り方のプロセスがわかる |
| 11 | 1000より大きい数 (算数) | 10進法の仕組みがわかる、数が読める、数が書ける |
| 12 | 三角形と四角形1 (算数) | 語彙 (直線、角、辺、頂点) |
| 13 | 三角形と四角形2 (算数) | 図形の特徴 |
| 14 | スーホの白い馬1 (国語) | お話の背景がわかる (異なる国・時代・地理的關係・馬頭琴) |
| 15 | スーホの白い馬2 (国語) | 主人公の行動や様子から気持ちを理解する |
| 16 | まちたんけん (生活) | 知りたいことを質問することができる、メモすることができる |
| 17 | あしたへジャンプ：できるようになったこと (生活) | 自分の経験を新聞・ポスターとしてまとめる |
| 18 | お話の作者になろう (国語) | 誰が何をした (最低) が書ける |
| 19 | 大すきなもの教えたい1 (国語) | 宝物紹介 (1年時に既習) の復習を通して、宝物を紹介するメモを作る |
| 20 | 大すきなもの教えたい2 (国語) | メモをもとに発表原稿を作り、発表会をする |

想定される課題と目標

言語や文化的背景の異なる子供達が「日本の」授業に参加する際には、言葉・経験・習慣・既有知識の違い等が学習参加への阻害要因となることが考えられます。

活動案では、日本国内で外国人児童生徒等の日本語指導に長年携わってきた教員の知識や経験から、それぞれの単元について「どこでつまづきやすいか」を示しています。こうした想定される課題への事前の対応が「本時の目標」になります。

指導のポイント・留意点

日本語指導の経験のない教員の手がかかりともなるように、必要に応じて、指導する「語彙」や「日本語表現」等を示しました。

○展開例(想定した児童)

「休み時間等の日常会話は母語話者レベルだが、授業中、指示が通らないことがある」「活動には参加しているが、まとめや振り返りが書けない、またはそれを見ると理解していない」と思われることがある」といった子供達を想定しています。

○展開例(日本語のレベル差への対応)

日本語力がより高い子供への指導のヒントは(△)、より日本語に困

難のある子供への指導のヒントは(▼)という形で、レベル差に対応できるようにしています。

○教材等

作成者がイメージした教材ですので入手できない場合は現地にあるものを使用して工夫してみてください。

次ページで示している一例は二年生の算数の活動案です。図形カードを用いた「体験的な活動」は学習への興味関心を高めたり、「直線」「頂点」といったキーワードを意識的に使用させることができます。「記憶の支援」(学習用語の定着)や、日本語のモデル文を示すことで「表現の支援」をしている点などが日本語指導のポイントとなっています。

この活動は算数が題材となっていますが、根拠を持って仲間分けの理由を説明するモデル文は、他教科の学習でも応用できるものです。

今後、活動案は冊子として刊行する予定です。今年度は、これを基にした授業の検証を行いつつ、他の日本人学校への展開も図っていきたいと思います。

日本語補習プログラムや活動案の作成等に関しましてご協力いただきました先生方に、この場を借りて謝意を表します。

活動案：学年2 教科 算数 単元名 三角形と四角形 1

1 授業の位置づけ(先行/復習など)：先行

2 想定される課題

新しい教科学習語彙「直線」「頂点」「辺」「角」等については日常生活で使うことがないため、理解に困難が予想される。

先行学習として体験活動を取り入れてその中で、「直線」「頂点」「辺」「角」という言葉を使うことにより理解を深めさせたい。

【本時の目標】

- ・「直線」「辺」「角」「頂点」の意味がわかる。
- ・「辺」「角」「頂点」の数に着目して仲間分けができる。

3 指導のポイント・留意点

- ・初めに、四角形・三角形・どの形でもない図形のカードを用意して、仲間分けさせる体験活動を行うことで、児童の興味関心を高める。また、特徴により分別する活動を通して教科学習言語の理解と活用を図りたい。
- ・仲間分けの根拠を話すときに必要になる言葉として「直線」「頂点」「辺」「角」を組み入れる。また、仲間分けの理由を話すときに、その言葉を活用することで記憶支援を図る。
- ・仲間分けの理由を説明するときには、モデル文「～が～だから(四角形・三角形・その他)にしました。」を使って根拠を説明することができるようにする。

4. 使用可能な教材・ワークシート

(注) 体験活動で使用する図形のカードは操作しても破れたりしないように、厚紙で作ってください。また、色等の他の要素で分けてしまったりしないように、全部同じ色で作成すると児童の思考を妨げないと思います。そのときカードに番号をふっておくと、児童が説明するときに説明しやすいと思います。

< 展 開 > (指導上の留意点：△日本語レベルがより高い児童への指導、▼日本語が弱い子どもへの指導)

| 時間 | 展開 | 指導上の留意点 | 使用する教材等 |
|-----|--|---|---|
| 5分 | 1. いろいろな形を分ける。 めあて 「どんななかまにわけたでしょう。」 | <ul style="list-style-type: none"> ・四角形・三角形・その他のかたちに分かれるような図形のカードを用意して、3つのグループに分けさせる。 ・直線ではない形を必ず入れる。 ・ペアまたはグループで取り組ませる。みんなで考えを聴き合う中で自分の考えを説明できるようにしたい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・様々な図形カードを用意する。 ・カードには番号を書いて分別するときに説明しやすいようにする。 |
| 10分 | 2. グループに分けて、その理由を発表する。 <四角形> 辺が直線で4本、頂点が4つ 4本の辺で囲まれている <三角形> 辺が直線で3本、頂点が3つ 3本の辺で囲まれている <その他> 直線ではない。 | <ul style="list-style-type: none"> ・頂点は「○つ」辺は「○本」で数えることをおさえる。 ・日常会話では使用頻度が低い算数の教科学習言語を正しく使って説明できないときは、「算数では、角というよ。」というように丁寧に訂正する。 ▼「辺で囲まれている」という日本語表現が理解できないので、動作化させて(3人ないしは4人で手をつながせるなどして)確認させる。 ・仲間分けの説明のときには、「～が～だから(四角形・三角形・その他)にしました。」というモデル文を使って説明できるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・掲示用の図形(ここでは五角形や六角形等は混乱するので出さない) ・「直線」「辺」「角」という言葉のカードを作り掲示する。 ・必ず言葉にはルビをふる。 |
| 5分 | 3. ワークシートに学習のまとめを書く。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教科学習言語にはルビをふって、児童が読み方を忘れてもいつでもわかるように支援する。 | |

エー
A
ジー
G
ファイブ
5
だよ

教員の実践的指導力向上のための支援

—日本人学校等学校採用教員内定者研修と『初任者研修ハンドブック』—

AG5運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談室長 植野美穂
東京学芸大学教職大学院 教授 赤羽寿夫

植野美穂



赤羽寿夫

日本人学校・補習授業校(以後、日本人学校等)の教員には、文部科学省からの派遣のほか、学校が独自に採用する教員がいます。この学校採用教員には教職経験者だけでなく、新卒者や転職して初めて教職に就く人などいますが、初任者であっても教師としての意識をもって、すぐに教壇に立ち、学校の運営に取り組んでいくことが求められます。今回は、AG5が2017年度から取り組んできた「教員の実践的指導力向上のための支援」について紹介します。

学校採用教員の研修プログラムの開発

近年、文部科学省による日本人学校等への教師派遣数は微増していますが、アジア地区の大規模校では、全教員に占める学校採用教員の割合が五割と高くなっているところもあります。学校採用教員の多くは新卒者もしくは教職以外からの転職者で、教師としての資質および指導力の向上が喫緊の課題となっている場合も見受けられます。

AG5では、学校採用教員の割合が半数を占める上海日本人学校の先生方にアンケート調査を行い、どのような研修のニーズがあるかを把握しました。この結果を受けて、二〇一八年度に上海日本人学校に学校採用教員として採用されることになった先生方に二日間にわたり東京で赴任前の事前研修を実施しました。

また日本人学校等への赴任が決定した段階で、海外で教師として働くことについてイメージしやすくするために、「教師としての心構え」「海外での教師としての基礎」「学級経営」「教科指導」「教科外活動」「危機管理」「保護者対応」などの内容をまとめた『日本人学校等教員のための初任者研修ハンドブック』を作成し



初任者研修ハンドブックの表紙

ました。そして一九年度学校採用教員内定者研修の参加者に配付し、さらに全日本人学校・補習授業校に送付しました。このハンドブックは、左記URLからダウンロードすることができます。

<https://ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme3/handbook2019.pdf>

一九年度の学校採用教員内定者に対する研修プログラムの実際

今年度の学校採用教員内定者研修は、二月十六日に国立オリンピック記念青少年総合センター、十七日に東京学芸大学附属大泉小学校で行われました。内定者は一二八人で、その内、一日目の研修には一一一名、二日目には一〇二名が参加しました。

初日の午前中は、日本人学校等や海外子女教育振興財団の概要、渡航手続きに関する説明のほか、文部科学省総合教育政策局教育改革・国際課海外子女教育専門官(当時)の小林美陽氏が「在外教育施設の概要お

よびグローバル人材育成に関する在外教育施設の特徴ある取組みについて」、またバンコク日本人学校校長の室賀薫氏が「海外で教壇に立つ学校採用教員の皆さんに期待！」と題した講話を行いました。

午後からはAG5メンバー等による「学校採用教員のための教員研修」が開始されました。研修プログラムは、一日目は「I 教師としての基礎的素養」「II 学級経営・生活指導・危機管理」「III 授業構成・運営の仕方と授業技術の基礎」(各八十分)、二日目は「IV 教科等指導の基本的な授業の進め方」(六十分)、「V ワークショップ」(八十分+一五〇分)からなり、ワークショップでは受講者は国語、算数・数学、社会、理科、外国語(英語)、音楽、幼稚園、養護の中から一つ選択し、グループに分かれて活動しました。



一日目の講義風景



算数・数学のワークショップ

まず「Ⅰ 教師としての基礎的素養」では、東京学芸大学附属大泉小学校副校長の細井宏一氏より、教師としての心構えや服務事項、学校の組織・運営、教育現場での一日・一年の流れ等について、初任者にもわかりやすい説明が行われました。

次に「Ⅱ 学級経営・生活指導・危機管理」では、東京学芸大学教職大学院特命教授の今井文男氏より学級作りのポイントおよび児童生徒や保護者との関わり方等について具体例を交えた説明があったほか、参加者同士のグループワークやグループディスカッションも設けられました。続いて東京都立国際高等学校指導教諭の高松美紀氏による「Ⅲ 授業構成・運営の仕方と授業技術の基礎」では、「単元、一時間の授業をどう構成するか」「授業の中でどのよう

に生徒と学習を進めていくか」「どのように効果的に学習目標を達成するのか」についてグループディスカッションが活発に行われました。その後、グループ内での話し合いの結果を全体で共有することで、与えられたテーマについて参加者が個々に再考することができました。

二日目の「Ⅳ 教科等指導の基本的な授業の進め方」では、細井氏が学習指導要領の改訂の視点および学習指導要領を踏まえた教科学習の基本的な授業の進め方、授業力向上のための授業研究・研修について全体講義を行った後、各教科等のグループに分かれてのワークショップが実施されました。

ワークショップではグループワークや模擬授業を通して、参加者同士が意見を交換し、赴任後に生かせる授業作りや指導方法の基本についての理解を深めることができました。

●理科のワークショップ

理科のワークショップを担当した講師の赤羽寿夫氏はその様子を次のように述べています。

理科教師として派遣される内定者は九名だった。当初、学校採用教員ということで新卒かまだあまり経験のない先生方が多いのではと思っ

ていたが、集まった内定者は年齢も教師としての経験年数も様々だった。

最初、自己紹介とともに「この研修に期待すること」について発言してもらったところ、「どんな授業をすればより良くなるのか、具体的なことを知りたい」、「海外で理科の授業を行う上で注意すべきことは」といったもの、さらには「高校での経験が長く、小・中学校での留意点について知りたい」といった課題を抱えている教員等、出発までにやるべきことが満載という感じだった。

そこで、午前中はまず小・中学生が理科の授業に期待することを取り上げ、実験観察といった体験学習の必要性を示した。中でも生物教材などは海外では日本の環境とはまるで違うため、代替えになる教材を現地で探すことの大切さを話し、映像教材など出発前に準備し持参することを薦めた。

九名の中には学校は違っても同じ地域に派遣される内定者もいて、すぐに仲間意識が芽生え、午前中の講義からリフレクションを行う頃には、情報交換ができる状況になっていた。

午後は三つのグループを作り、模擬授業の計画と実践を行うことにしていたが、九名という参加人数はこのようなワークショップを行うため

の環境作りにも有効に働いた。あまり指導案作りにはこだわらず、教材を絵にかいても良いということで、協力して二十分程度の授業を一時間で作成してもらった。午前中の雰囲気から和気藹々と作業は進み、各グループが工夫を凝らしながら、無事に二十分発表会を終わらせることができた。この経験を通して、授業を作る難しさや行う楽しさを感じてもらえたのではないかと願っている。

●内定者研修のアンケートより

二日間の研修を終えて、下記の研修の目的を達成できたと思う人の割合は、①は八四％、②は八一％と高い評価が得られました。

- ①日本人学校等の教師として求められる基本的な心構え、具体的な指導法等について学ぶ。
- ②研修を通じて、同期の教員同士との連帯感を高める。

なお、研修の参加者からは次のような感想がありました。

・教師、社会人としての心構えをしっかり確認することができ、初めて教壇に立つ自分にとって、具体的な学級経営の行い方や組織の関係作りについての講話が聞けて、とても参考になりました。

・私は新卒なので、学校の先生がど



保健室での養護のワークショップ

- ・ ennaことをするのかという基礎を教えていただけで良かったです。
- ・ 先生の実体験を踏まえて、日本人学校の子どもの視点を考えることができた。
- ・ 海外の地で、教師としての責任感を持つことの重要さに気づくことができた。
- ・ 児童・保護者の立場に立った上でのコミュニケーションの大切さを痛感しました。
- ・ 危機管理について学ぶ機会がなかなかないのでよかったです。
- ・ すでに教員をしていますが大変勉強になりました。初任者の頃、本日のような基本的なことを学びたかったです。
- ・ 自分の指導案だけにこだわらず、子どもの問いを取り入れる授業を行いたい。

・ 自身の授業の組み立てが、発問しても正しい答えを求めてしまっていることを考えさせられました。授業の流れや教材の準備など見直してみます。

・ 授業作り、展開について沢山学ばせていただきました。授業をしていると、どうしても講義形式になってしまい、子どもの主体的な授業がなかなかできずじまいでしたが、教師自身が学ぶことを楽しみ、一つずつ子どもと学び丁寧な指導を心がけることがとても大切だと思えました。

・ 教育に対して感じる違和感や疑問をきれいに明文化し解きほぐしてくださいような時間でした。もっとお聞きしたかったです。

・ 探究型の授業を体験して、その意義、おもしろさを感じることができました。評価のあり方として、ルーブリックを提示することがとても良い方法だと思ったので、今後の参考にしたい。

・ 保健室についての具体的な内容や資料を沢山見せていただいて、とても勉強になりました。先生の実践例も教えていただき、自分でもやってみたいと思うことが沢山ありました。もっと時間が欲しかったです。

・ 具体的な指導方法や教具、楽器のメンテナンスの仕方を教えていただけだったので、これから実践したいと思います。

・ 幼稚園指導要領などもう一度振り返ることができて良かった。実際の保育の現場の写真を見ながら、一人一人の子どもの気持ちを考えていくことの大切さを知った。

・ 短期間でしたが、同僚となる人や他校の先生と出会い、期待と不安が共有でき、これからすべきことが明確になった。

二日目のワークショップは、東京学芸大学附属大泉小学校の教室を借りて、理科と音楽は特別教室、養護は保健室、それ以外の教科等は一般教室でワークショップを行いました。そのため、教室の掲示物を教材として取り上げたり、実際に使用されている教材・教具を見たりすることができました。

どの教室でも積極的にワークショップに取り組み参加者の姿が見られ、講師の先生方からも「参加者はみんな熱心でやる気があり、楽しく授業ができた」という感想が寄せられました。八つの教科等の中から、参加できるワークショップは一つのみだったため、参加者からは「複数教科のワークショップに参加したかった」という意見が多数ありました。

二日間の研修を終え、参加者は、教材研究の重要性を再認識し、渡航前に、赴任国の歴史的背景の確認、学習指導要領の読み直し、教材集め、教材のデータ化等に取り組み必要性に気づくことができました。

研修に参加された皆さんが赴任先の日本人学校等で良いスタートが切れ、意欲をもって教育活動に取り組みられることを願っています。

〈ワークショップの講師名と所属先〉

(敬称略)

- 国語 高松美紀(東京都立国際高等学校指導教諭)、算数・数学 細井宏一(東京学芸大学附属大泉小学校副校長)、社会 平田博嗣(清泉女子大学文学部司書・教職課程特任教授)、理科 赤羽寿夫(東京学芸大学教職大学院教授)、外国語(英語) 小松万姫(東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭)、音楽 角町美穂(東京学芸大学附属大泉小学校教諭)、幼稚園 山田有希子(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎副園長)、養護 倉澤順子(東京学芸大学附属大泉小学校養護教諭)

* 次年度の学校採用教員の内定者研修は、二〇二〇年二月十五日・十六日に東京学芸大学附属大泉小学校で実施する予定。

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

エー A ジー G5 ファイブ だよ



担任による日本語指導の確立

——より上質かつ効果的な指導を目指して——

台中日本人学校校長 栗田 友季子

本校におけるAG5の取り組みは3年目を迎えました。昨年までの研究に加え、本年度は「担任による日本語授業」と「研究の横展開（台湾の3つの日本人学校及びマニラ・大連・青島の日本人学校への展開）」に重点を置き、研究を進めています。担任の指導による日本語授業に加え、普段の授業の中でどのような支援ができるかという「在籍学級における日本語指導プログラムの開発」を目指して研究を行っています。

AG5と台中日本人学校

「保護者が共に、またはどちらかが日本国籍ではない児童・生徒の割合が約五〇％」というのが、本校の特徴の一つです。

AG5が掲げているねらいには、次の三点のプログラム開発があります。
・海外に在住する子どもたちに高度なグローバル人材としての基礎力を育成する。
・国際結婚家庭や永住者の子どもが増加に伴う日本語力向上のための教育を提供する日本語指導。

・日本語教育や日本文化の発信の拠点としての役割を果たす。
これらのねらいと本校の特徴を鑑みると、AG5の研究テーマの一つ「日本人学校における日本語教育プログラムの開発」に関して、本校が研究提携校となったのは当然でもあり、児童・生徒の学力向上という点において大きなチャンスでもあったわけです。

一年目（二〇一七年度）の取り組み

一七年度は、まず台湾の日本人学校三校（台北・台中・高雄）が共通理解を図り、理論研究と実態把握か

ら始めて、各々の方向性を決定するところまで進めました。六月・八月・十二月には日本から運営指導委員のメンバーに各校頂き、次の三点が始まりました。

・子どもの日本語能力の実態把握
・教員向けのJSL研修の実施
・日本語補習プログラムの検討
また十二月末には、台北校において日本語授業の参観と日本語指導研修会を実施。さらに翌年二月の日本国内研修では、浜松市内の小・中学校で日本語の授業を参観、及び海外子女教育振興財団で意見交換し、理論研究や方向性についての共通理解を図りました。

二年目（二〇一八年度）の取り組み

前年度の理論研究を受けて具体的な取り組みが始まり、次のような流れで研修を深めていきました。

- ・五月 日本語授業参観・研修会
- ・六月 台北校授業参観
- ・日本語支援を取り入れた研究授業・実践の累積
- ・八月 AG5校内研修会
- ・九月 公開授業を受けての校内研修会（台北・高雄参加）
- ・十二月 台北校授業参観
- ・二月 日本国内研修会

「日本語授業」は、小学部の各学年担任が「日本語授業リクエスト」を提出し、それをもとに日本語指導担当者が授業を行うようにしました。

授業後、担当者は授業内容を記録し、その記録を土台として個人ごとの「日本語指導カリキュラム」を作成しました。九月には、日本語担当者として児童実態調査（DLA等を活用）を行い、職員間で結果を共有。その後の授業研究では、JSLカリキュラムの日本語支援の五つの視点（理解支援・表現支援・記憶支援・自律支援・情意支援）を意識した授業を実践しました。事前の指導案作成の際には、次の点を確認し、実践した次第です。
○指導案に日本語支援の手立てを記入すること。

小学部4年 日本語授業リクエスト

第10週（6月11日～6月16日）の日本語授業

●授業のねらいは、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**

●授業のねらいは、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**

●授業のねらいは、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**、**漢字の読みかたを覚えること**

2日1回、日記の宿題を出してあげた。
最初は少しづつ書いてもらって、書くことの負担も少なく済ませた。しかし、又と読むと語彙が乏しく、文脈の短い文章を書いてほしい。
なので、私の指導が有効な方法はないかと、
国語の教科書には、言葉のたぐり類の授業を履かからず、
作文指導として扱った。

小学部4年 日本語授業リクエスト

| 小6 | 日本語授業 |
|----|--|
| 4月 | 音読 複写 プリント |
| 5月 | 音読 複写 プリント ニンジャカド 作文 |
| 6月 | 音読 読解や言葉の意味の定着 読書引き 漢字 「字彙が命余らしよう」写しのり紙を貼って自分の手紙を添える練習し、質問に合った答を練習する練習 相手の気持ちに気を配る プレゼンテーション(一つの課題について自由に意見を出し合う) 「ようこそ、私たちの町へ」お話を聴く図表を書く。マッピング 1学期の夏休みの宿題 (1)~(4) |
| 7月 | |

小6 日本語授業

○授業後に日本語支援に関する成果と課題をまとめること。

さらに、日本語支援の視点で指導者が具体的に取り組んできたこととしては、例えば次になります。

- ・日本語力が十分でない子に対して、モデルの提示やバイリンガルの支援員による説明など個別支援をすることを意識している。また絵本を貸出したり、授業で音読をしたリすることを継続している。
- ・基本的な文型を指導することで、説明に関するフォーマットを共有させている。
- ・「わかりやすく伝える」という相手意識・目的意識をもたせている。

・言語習得支援の視点では、大文字やイラストに加え小文字も使用(視覚支援)している。

・意味のカテゴリー別に文字の色分けをしている。

・話し方の手本を示し、自分の考えを明確に伝えられるようにしている。

・算数では数直線などを用いることで、問題文の場面を視覚的に理解させることができた。

・教科の既習内容に関連付けながら、イメージと言葉をつなげさせている。

・目で見てわかる資料を多く用意し、資料活用の技能や思考力を高めさせている。

・日本語や学習内容の理解を促すために、視覚化・簡略化している。

・言葉で表現することが困難な児童が多いため、言葉以外の表現方法を示し、多様な方法での表現を促している。

・「正方形」「対角線」「垂直」「面積」「二辺」「平方根」など、学習用語をきちんと用いて説明させるよう意識している。

これらは教科の特性を超えた視点として共有されることとなり、以後の授業展開の指針として具体的な「二つの工夫」にまとめることができました。

①言葉を理解させる工夫



↓難しい言葉、理解が困難と思われる言葉を他の言葉に置き換える。

↓算数の授業では、算数の用語を意識して使う・使わせる。また、用語を用いて説明させる。

↓資料(国語辞典・言葉図鑑・資料集)から、言葉の意味や情報を獲得させる。

②視覚化して理解を促す工夫

↓カードなどを提示・掲示する。

↓絵や図にして掲示する。

↓実物投影機やプロジェクターなど、ICTを活用し、よりわかりやすく示す。

以降、これらの工夫を適切に盛り込んで授業に臨むことができるようになった。

になりました。

三年目(二〇一九年度)の取り組み

二年間、台湾の三校で理論研修を積み重ね、方向性も定まった三年目。今年度のAG5は、これまでの成果を軸にして、台湾三校だけではなく、他の日本人学校(マニラ・大連・青島)への「横展開」に移行します。

そこで私たちは新たに四本柱を立てて研修に取り組んでいます。

〈柱1 学級担任による日本語授業〉

↓昨年度は一人の日本語担当教員が六年年の日本語授業を行っていた。しかし、児童の日本語力を把握できる学級担任が日本語授業を行うことで、よりきめ細やかな指導や支援ができ、学級での授業進捗と児童の実態に合わせて授業を組み立てられる。

↓一年間、授業内容を記録し、カリキュラムとして構成していく。そして次年度以降は、日本語の指導法に関しても研究を進めていくとともに、その内容をどの日本人学校でも取り組めるよう、汎用性の高いものにしていきたい。

〈柱2 AG5 校内研修会〉

↓次の研修会を実施。

・五月 台中校での日本語授業の

エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業



「補習校バンク」の構想

AG5 運営指導委員・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々信行

AG5の活動に関わってくださった方は、補習校が「グローバル人材」を育てる絶好の場であること、そしてまだまだ大きな可能性を秘めていることをあらためて実感していただけていると思います。AG5が終わってもこの成果がひきつがれ、発展していくように「補習校バンク」のアイデアをご提案したいと思います。

先生たちの声

AG5が始まった二〇一七年に、補習校チームのメンバーがアメリカの補習校八校を訪問して先生方と課題や困っていることなどについて話しました。そのときに先生方からの声で特に強かったのは「相談できる相手がほしい」ということでした。

小さい補習校では一つの学年を担当する先生が一人だけという場合もめずらしくありません。中学校で教科担任制なら、国語一人、数学一人、社会一人といった具合になります。同じ立場の先生が他にいないので相談できず、それぞれが孤独で悩むしかないという問題がありました。

大きな補習校では一つの学年に複数のクラスがありますが、先生はぎっしり授業を持っているのが普通です。一緒に教材の準備をしたり話し合ったりする時間は限られます。授業後に研究・研修の場を設けている補習校は少なくありませんが、開催回数が十分にとれず、扱える内容も限られているのが現状です。

補習校の先生たちは二つ以上の顔を持っているので、補習校の仕事に使える時間は限られています。しかも、教員経験をほとんど持たずに教えなければならぬ場合もあります。

フルタイムの先生であっても難しい仕事を一人でやらなければならぬ大変さは、教員経験のない方にも容易に想像していただけたと思います。

仲間はいる

本誌二〇一九年の一月号「ただいま何人!」によると、「補習授業校」は二二四校(休校含む)、外務省の援助の対象にはなっていない実質的な「補習校」が二十五校あります。

勤務校では、例えば「三年生を教えるのは私一人」で相談できる人がいないとしても、世界中には同じ学年を教える先生が少なくとも三〇〇〜四〇〇人はいいます。また、相談相手になれる人は補習校の先生に限ることはありません。日本国内の先生、補習校のOB・OGなど、いろいろな人が考えられます。子供や保護者からもよいアイデアがもらえるかもしれないかもしれません。相談できる人は必ずいるのです。問題はその人をどう見つけ、どうつながるかです。

この解決策には近年の技術進歩のおかげでいろいろなことが可能になりました。私たちが始めた「補習校教員交流Toolbook」のメンバーはすでに一三〇人ほどになっています。二〇一八年度から、テレビ会議システムを使った報告会や研究会を開

いています。参加者は少しずつ増えていきます。九月に開いた「研究会報告会」には四十人ほどの参加がありました。今はまだ、あらかじめ登録していただいた方々への案内が中心ですが、少しずつ門戸を広げ、参加者が活発に話し合えるような環境を作っていきたいと思っています。

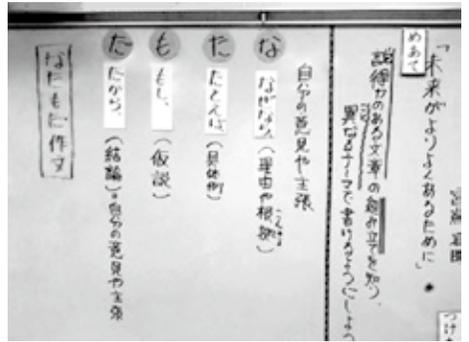
方法はある

授業を組み立てるときに解決しなければならぬ悩みは数々ありますが、解決策もいろいろ工夫されています。中には、まねるだけで自分のクラスが楽しくなるようなアイデアもあれば、そのままコピーして明日の授業に使える教材もあります。

AG5とダラス補習授業校で行った合同研究会では、「なたも作文」「サイコロゲーム」などの指導技術が注目されました。



「合同研究会」のワークショップ



「なだもだ作文」の板書

「なだもだ作文」は、「なぜなら」「たとえば」「もし」「だから」という言葉を書いた順番に自分の意見を主張する文を書いていくというものです。四つの言葉を示しておくだけで、文を書いたりスピーチを組み立てたりすることが容易になります。「サイコロゲーム」は、あらかじめサイコロに話すテーマになりそうな言葉を書いておき、自分が振ったサイコロに示されたテーマで何かを話すというものです。どの目が出るかというドキドキ感を楽しめるので、グループ活動などに使えます。サイコロに書かれた言葉は見えるので、それぞれが話す内容を考えながら集中して活動ができます。

多くの先生たちがたくさんさんの場所

で考え出した指導法の中には、聞くだけで簡単に使えるものが少なくありません。一人では限界がありますが、アイデアを交換し合えばよい方法が案に見つかるかもしれません。AG5の活動としてこれまででダラス補習授業校の先生方と作ってきた具体的な学習活動計画やワークシートなどの資料は、AG5のウェブサイトからどなたにでも入手していただけるようになっていきます。

もっと多くの方の力を借りて多数の計画案や教材などを蓄積できれば、必要なときに役に立つ材料がより手に入りやすくなってくるでしょう。

子どもたちの多様性

どの補習校でも深刻な悩みになっているのは子供たちの日本語の力が大きく異なっていることです。帰国を前提に学んでいる子供と当面帰国する予定のない子供のニーズの違いも状況を複雑にしています。

残念ながら、補習校に入学はしたものの途中で続かなくなってしまう子供もいます。日本語力が違っていても楽しく学習できる方法があれば、もっと多くの子供たちが補習授業校を続けられるかもしれません。

ダラス補習授業校の四年生の先生は保護者の方から「日本語があまり

得意でないので補習校に行くのをいやがっていました。今回の学習にはたのしく取りくめたようで、家庭でも積極的に準備をしていました」というお手紙をいただいたそうです。このときの授業は「発見！ 私たちのテキサス」という単元で、テキサス州のことを調べてポスターセッションで発表会をするというものでした。先生の説明を聞いたり、決められた文章を解釈したりする授業では、日本語が一定のレベルに達していなければ参加して力を伸ばすことはなかなかできません。反面、自分の力を使って調べたり表現したりする学習には、どんな子供でも自分なりに取りくむことができます。

補習校の場合、日本語力が弱くても英語力は十分という子供も少なくありません。テキサスのことを調べる学習は、英語力のある子には取りくみやすく、それを日本語で発表することに意欲が持てたようでした。ポスターを作ったり、みんなの前で話したりするのはアメリカの学校でよくやる活動なので慣れていたという側面もあるでしょう。発表の準備の時にはお父さんやお母さんの応援も少なからずあったと思われる。

日本語に不自由のない子供たちは、もちろん自信を持って積極的に取り

くんでいました。「何を教えるか」より「どんな活動をさせるか」を考えて授業の計画を立てることで、一人ひとりが自分の日本語力を（英語力も）しっかり使って学習できたように思われます。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学びアクティブ・ラーニングという視点からの学習過程の改善」が言われていますが、これもその一例と言えるでしょう。

日本の学校での指導法が補習校の先生たちの助けになるのはもちろん、補習校の実践が日本の先生たちの参考になることもあるのではないのでしょうか。国内の先生たちとつながれることにも大きな期待があります。

先生たちの多様性

補習校のスタッフは限られているので事情を忖度して担当を決める余裕はありません。例えば低学年の子供に接したことがない人がいきなり一年生を教えることになったら結構大変です。

私が日本の学校に勤めていた時、いつも交通安全指導に来てくれる警察官が急に来られなくなったことがありました。代わりの警察官は「本署管内の歩行者の事故の原因は……」という感じで話し始めました

が一年生には全く通じず、すぐに飽きた子供たちが騒ぎ始め、担任の先生が「通訳」に入って何とか授業を終えたことがありました。代役になった方には気の毒でしたが無理もありません。

小さい子とつき合う経験を積んだ人は一年生に分かるように話すコツを知っています。そのいくらかは経験のない人にも伝授できるのです。

「一度に二つ以上の指示を出さず、一つが終わってから次の指示を出すこと」、「みんなではなく、わたしに、ぼくに向って先生が話しているような印象を持たせること」などと聞くだけでもいくらか話しやすくなるでしょう。具体的事例を交えればさらに分かりやすくなると思います。多くの補習校の先生たちがつながれば、一人の経験をたくさんの人に伝えていくことができます。補習校の垣根を超えて初任者研修会のような行事を行うことができれば新しい先生方の不安をいくらかでも楽にすることができるとしよう。

置かれている状況はそれぞれ違いますから、みんなが同じことを必要としているわけではありません。提供できる支援も人によって違います。提供する人と受け取る人がうまくつながることが必要です。先生たちは

世界中に散らばっているので時差の問題も解決しなければなりません。

いつでも必要な時にリクエストができ、いつでも可能な時に手伝いができるようにすることが理想です。

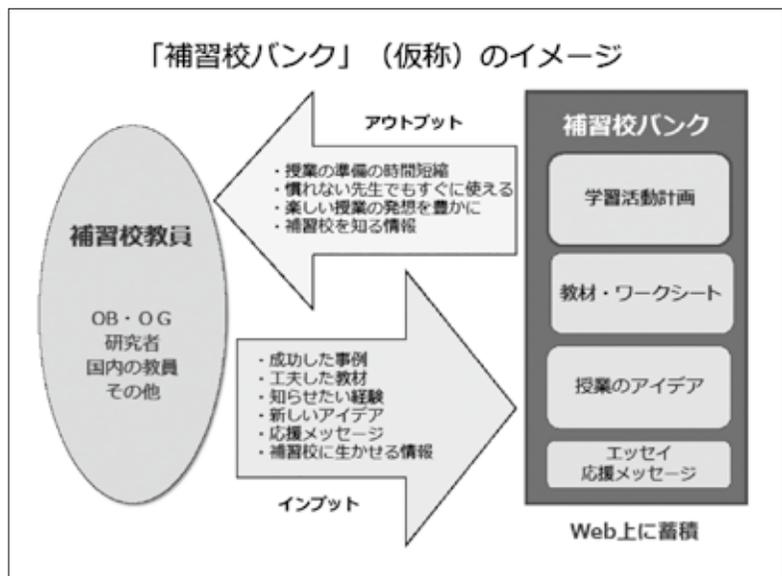
生活状況も刻々と変わっていきま

す。例えば小さい子供を育てている時は余裕がないのでほかの人の応援までは手が回らないかもしれませんが、少し時間が自由になるようになったら誰かの手伝いをしたくなるかもしれない。退職してゆつたりとした暮らしになれば、若い人の悩みにじっくりと答えてあげることが張り合いになることもあるでしょう。

提供できるものは、直接授業に関するものばかりではありません。長い間日本を離れていると、何気ない日本の風景に心を

和ませられることがあります。世界の各地の写真や情報を見ると、同じように補習校で働いている人たちが遠くにもいる事実にも励まされます。補習校OB・OGや元補習校生からのメッセージは悩みの中にいる人を勇気づけるでしょう。

学校関係者や教員とは全く違う立場の方々からの新鮮な視点からの意



見は、思わぬ形で授業に活気をもたらすかもしれません。このようなつながりのイメージに、もっと適当な名前があるとは思いますが、仮に「補習校バンク」と名づけてみました。いずれにしても、大勢の皆様仲間になっていただくことがこの活動を効果的にする決め手です。

補習校を知ってもらおう

日本国内では「補習校」はまだあまりなじみのない存在ですが、補習校がどんなところかを分かってもらえれば、海外に住んでいる子供や海外に行く子供たちと付き合いのない人にも興味関心を持ってもらえるのではないかと思います。

今のところ、外国人の子供に日本語を教える先生等とつながりができてきたところですが、補習校のネットワークが日本国内にも広がっていくことは大きな意味のあることです。

IT等の技術進歩のおかげで、物理的にどんなに離れていても工夫次第でつながりを持つことができます。AG5と補習校の皆様との活動が日本の子供たちの教育に新しい風をもたらすことになればうれしいです。

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

マニラ日本人学校における総合学習型日本語指導プログラムの開発

AG5 運営指導委員・目白大学専任講師 近田由紀子
 マニラ日本人学校教諭 渡邊花穂

2019年度、AG5は研究拠点を大きく広げました。「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」には、台北・台中・高雄に、マニラ・大連・青島の日本人学校が新たに加わり、各校の特色に合わせた実践研究を積極的に進めています。本稿では、マニラ日本人学校での取り組みを紹介します。



近田由紀子氏



渡邊花穂氏

はじめに

マニラ日本人学校は、昨年創立五十周年を迎えた歴史のある学校です。児童生徒数四七四人(二〇一九年四月)のうち約二〇%が国際結婚家庭の子どもであるとともに、年間約四分の一の児童生徒の転出入があり、多様性にも富んでいます。

特色ある教育活動として、小学部一年生からの英会話授業の実施、年間を通しての水泳学習、現地校との交流を通しての国際理解教育、少数教授業やT.T指導等の指導方法の工夫改善、日本語の習熟が十分でない児童を対象とした「日本語学級」の実施、生活科や総合的な学習の時間を使ったフィリピン理解の学習の実施を推進しています。

そして何より教職員のチームワークが良く、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための実践研究に学校をあげて積極的に取り組んでいることが特徴です。

日本語指導の課題

週一時間金曜日の放課後(小学部一〜三年生は年間二十四時間、小学部四〜六年生は年間十六時間)に「日本語学級」が開設され、現在三十八人が学んでいます。日本語学級で学

ぶ児童らは、在籍学級での授業で教師の指示が理解できなかったり、自分の気持ちを伝えられなかったりすることがあるそうです。

英語では理解できても日本語の学習言語能力が十分でないことや教科学習を支える体験が不足していることなどによるつまづきがあることが考えられました。

しかし、対象児童個々の日本語力や多様な実態が異なること、それらを踏まえた効果的なカリキュラムが確立されていないことが課題でした。これらの課題の解決を図るためAG5として支援を進めることにしました。

AG5拠点校として精力的に進められる実践研究

一九年六月、AG5のメンバーで明治大学特任教授の佐藤郡衛氏と同じく海外子女教育振興財団の中村雅治氏がマニラ日本人学校を訪問し、次の三点について進めることを協議しました。

- ① 金曜日の「日本語学級」で使える日本語指導プログラムの開発
- ② 子ども日本語能力の判定
- ③ 在籍学級での指導方法の開発

八月初旬、マニラ日本人学校日本語指導コーディネーターである渡邊花穂教諭が日本国内で研修と打ち合

わせを行いました。

八月三十日にはAG5メンバーの群馬県大泉町立北小学校市川昭彦教諭と筆者がマニラ日本人学校を訪問し、授業参観・協議・教員研修を実施、本格的なスタートを切りました。この日を境にマニラ日本人学校の日本語指導チームには三好豪教諭・田中亜紀教諭も加わり、学校全体で取り組む体制も整えられました。

その後、テレビ会議等による情報交換を行いながら、始めてわずか二カ月間で、DLAによる日本語力測定や年間計画の作成・学習活動案の作成等が精力的に進められています。十月から授業実践も始まりました。

今後PDCAのサイクルで改善を図り、マニラ日本人学校の実態に即した日本語指導プログラムを開発し、次年度実施予定である汎用性の高いプログラムの開発に繋げる予定です。二月には合同研究会も実施します。

教員の意識を変えた研修

多忙な日本人学校において研修時間を確保するのはとても難しいことですが、全教職員が一堂に会して研修する時間を設定していただきました。四十五分間という貴重な時間で伝えたいことを精選し、「AG5プロジェクトについて」「日本語指導

の基本的な考え方について」「国内研修報告」「在籍学級での指導について」を取り上げました。

渡邊教諭の実感を伴った説得力のある報告や、市川教諭の豊かな経験に裏付けられた具体的で分かりやすい講話により、教職員の意識が見事に変容しました。

研修アンケートから一部抜粋して紹介します。

・渡邊先生の「日本語力は国語の時間だけで身に付けるものではない」という決め台詞がとても印象的だった。道徳が教育活動全体を通して教えられていくことと同様に、語学は様々な分野からのアプローチが効果的であることを学んだ。

・「教科を学ぶための日本語力を身に付けるための日本語指導」という視点をもつことで、先生方の日本語指導への意識が変わったように思う。

・日本語指導Ⅱ日本語の語彙を増やす指導という固定概念にとらわれていた自分の考えを一八〇度変えていただけのような研修になり、大変有意義な学びの機会になった。

・他教科の中で、日本語が不得手な子たちに活躍の機会を与える授業づくりをすることは一筋縄ではないが、我々教師の腕の見せ所かと思う。

・日本語学級の児童のみでなく、児



市川昭彦教諭による在籍学級における指導方法についての講話

童がスムーズに学習するために必要であると感じた。

・体験型の学習の紹介をしていただき、今後の授業で参考にさせていだきたい。

・「家庭での支援の仕方」についてとても興味深く、今後の支援に生かしていきたいと感じた。

・特に母語がしっかりと身に付いていないと、どの言語も中途半端になると聞き、納得できた。今まで出会った子から常々感じていたことなので、今後保護者にも自信をもって伝えられる。

・学校をあげて取り組むべき課題だと思った。

・日本での勤務校地域が外国籍の多い所、帰国してからもすぐに利用できる内容だったので、非常に有意義だった。

・日本語指導の内容をさらに発展させると、日本文化にもつながり、文化理解や社会性なども育むことができるのではないかと思った。

研修終了後、「日本語学級」でも在籍学級でも総合学習型の指導が効果的であるという認識や帰国後を見据えた実践への意欲も高まり、市川教諭の講話をヒントに在籍学級での授業に工夫を始めた先生方も少なくなると嬉しい報告も伝えられました。

以下、日本語指導コーディネーター渡邊教諭から寄せられた「学びや気付き」のほか、在籍学級での実践について紹介します。

今年度、プログラム開発のお話をいただき、まずは日本語指導の現状を知るため、日本へ研修に行く機会をいただきました。

海外子女教育振興財団が共催された文部科学省主催の「トビタテ！グローバル教師フォーラム」をはじめ、今後のAG5の取り組みのための打ち合わせや浜松市での研修など、盛

りたくさんの日々を過ごしました。多くの学びがありました。その中でも特に心に残った三つのことを紹介します。

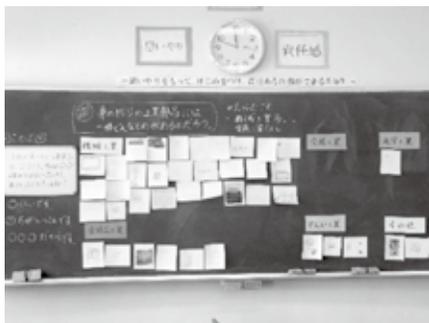
●国語の指導ではない「日本語指導」
これが一つ目の大きな学びと気がきます。マニラ日本人学校では、週に一時間、取り出し型の日本語指導を行っています。

これまで私は「日本語指導Ⅱ国語の指導・言葉の指導」というイメージをもって、児童を指導してきました。しかし、今回の研修でその認識は大きく変化しました。本校のアドバイザーである近田由紀子先生と市川昭彦先生と打ち合わせをした際に、JSLカリキュラムの指導について講義をしていただきました。

その内容は今までの私の常識を大きく覆すものでした。「授業に参加する力を培うための日本語指導」という視点をもって指導する大切さをご教授いただき、日本語指導の可能性を大きく感じた一日でもありました。

●通常学級の中でもできる多くの日本語指導

これが二つ目の気付きです。今まで、日本語指導をするためには取り出しを行い、少人数で指導することが大事であると考えていました。もちろん、そういった指導も必要です。



日本とフィリピンの工業製品を絵カードで分類

しかし浜松市での研修を通して、「ある程度日本語の力が身に付けば、取り出しで行うより通常学級で少し工夫を加えて指導をすることで身に付く力もあるのではないか」と考えました。そして、「学級で児童にできることがもっとたくさんある」ということに気付きました。

「日本語学級だけに日本語指導を任せるのではなく、通常学級と日本語学級の両方で日本語の力を伸ばすことで、児童の日本語力をより高めることができる」、そんな当たり前のことに気付かされた研修期間でした。

また、そうした指導を通常学級に取り入れることで授業がより分かりやすくなり、他の児童の力も伸ばすことができます。

●バイカルチュラルの視点を取り入れた授業の大切さ

そして三つ目は言葉だけではなく、フィリピンの文化などを取り入れる実践も重要であるということです。

理由はまず、フィリピンのことを授業に取り入れることで、日本語学級の児童が授業に参加しやすくなるからです。自分が生まれ育った土地のことなので、自信をもって答えられることもたくさんあると思います。

次に、日本だけでなくフィリピンについても学ぶことで、より広い視野をもって物事を考えることができるようになるからです。これは、どの児童にとっても重要です。

また、視野を広げ思考力を深めるためには、考えを表現する力が必要になります。その力を養うことは、日本語力の向上につながります。

●日本語学級での社会科中心の授業担任をしている五年生の取り出し指導では現在、社会科を中心に授業を行っています。なぜなら、社会科で習う専門的な言葉の意味を理解できていないことが多くあるということに気付いたからです。

社会科で出てくる言葉は普段の日常会話で出てこないものがたくさんあります。そのため、一学期は、自信がなく、手が挙がらないことがほとんどでした。二学期になり、社会科で出てくる難しい言葉に焦点を当てて授業をしたり、フィリピンの文化と日本の文化を結び付けて授業をしたりしています。そうすることで、通常授業で自信をもって学習活動に取り組んだり、発表したりする姿が見られるようになりました。

●「モデル文」と「バイカルチュラルの視点」を取り入れた実践

「工業生産と工業地域」では、この二つを意識した授業を行いました。

「身の回りにある工業製品」と「フィリピンにしかないと思う工業製品」を絵カードに書き、それを工業の種類別に分類しました。その際に「私が見つけた工業製品は○○です。私は、○○工業の仲間だと思います。皆さんはどう思いますか。」という「モデル文」を使って、自分が見つけた工業製品について発表しました。

「モデル文」を用意することで、全員が自分の見つけてきた工業製品がどの工業に属するのかという意見を述べることができました。もちろん、日本語学級にいる児童も例外ではありません。また、「皆さんはどう思いますか。」と聞くことで、発表を聞いている児童も友達の発表に対して自分の意見を述べることができました。

AG5日本人学校日本語力向上プログラム 二月合同研究会 @ マニラ日本人学校のお知らせ

〈テーマ〉バイリンガル・バイカルチュラル人材育成を目指した授業づくり／日本人学校のネットワークを力に

本研究会は、直接先生方にお集まりいただく「マニラ会場」と、テレビ会議システムを通して参加していただく「Zoom会議システム会場」の二つを設定いたします。

ご都合のつく時間のみの参加も結構です。貴重な機会ですので多くの方々のご参加をお待ちしています。

日時 二〇二〇年二月二十一日(金) 十時～十六時半(日本時間午前十一時～十七時半)

内容

- ① 提携校による日本語力向上プログラム実践報告(マニラ・大連・青島・台北・台中日本人学校)
- ② 参加者による情報交換会
- ③ 授業公開(在籍学級：五年生、日本語学級：一年生・二年生・三年生)
- ④ 講演会

参加申込先 海外子女教育振興財団

AG5事務局

Email: ag5@joes.or.jp

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

AG5 合同研究会 ダラスからつなぐ！ 補習校の輪

(写真左から) ダラス補習授業校 副校長 佐々木常広 小4教諭 バーバー悦子 小3教諭 長本玲子 小6教諭 佐藤恵美



真夏の太陽が照りつける8月12日、AG5補習校チームから専門委員の岡村郁子氏と近田由紀子氏を迎え、ダラスで「AG5合同研究会」が実施されました。この研究会は「テレビ会議」の形で行われ、遠隔地よりWEBで参加された先生方もいます。

昨年よりも参加者の人数と参加の仕方が広がった今年の合同研究会について、ワークショップや学年懇談会でファシリテーターを務めた私たちが振り返ってみました。

八月合同研究会のワークショップについて

佐藤 今回のワークショップでは、研究会に参加していただいた先生方がすぐに現場で試せるアクティビティを紹介したいと思いました。昨年から今年にかけて行った小六の授業の中から、子どもたちの様子を思い返してみても、子どもたちの反応が良く、効果的だと思つたものを選んでみました。

長本 今回は「説明文を書くための単元」で実践したアクティビティを紹介しましたが、これらは物語文の単元で内容を深く理解するための手立てとしても使えます。単元に応じてアクティビティの活用の仕方が広がることを多くの先生方に知っていただきたいと思つていました。

バーバー 授業で何か新しい取り組みをした時に、紙面でその方法を讀んだだけでは、一体どういったアクティビティになるのか、想像が付きにくいことがあります。今回は、子どもが主体的に取り組めるアクティビティを先生方に実際に体験してもらうことで、その方法を理解していただければと思つていました。

また私自身も、今まで実践してきた自分の指導法を振り返ること



で、授業中に子どもたちがどのように目標に向かって活動に取り組んでいくかを改めて考える機会にしたいと思つていました。

佐々木 それぞれのワークショップで紹介し、先生方に体験してもらつた活動は、実践した学年だけのものではなくて、他の学年や違う単元でも活用できるというところがポイントですね。

佐藤 私も昨年の小四で実践された「サイコロQ&A」を小六の単元でやってみたところ、子どもたちがとても興味を持って取り組み、グループ交流の場で発言が活発になりました。やり方の基本を知っていると、自分が担当している子どもたちに合わせてアレンジして活用することができます。

佐々木 そういえば、今年の小二の

研究授業では「書く単元」をしていましたが、ここでは他の学年で有効だった授業プランを、小二用に変えて行っていましたね。

バーバー 今回のワークショップでは高学年の単元で実践したアクティビティを紹介しましたが、その中から別の学年にフィットするものを探していくと、指導スタイルが広がっていきます。

すぐに役立つ授業技術ワークショップ

| | |
|-------------|--|
| A (担当：バーバー) | <ul style="list-style-type: none"> ・ジグソー法を用いたグループワークの学習活動 ・クイズ形式(ジョパティークイズ)による情報発信の学習 ・導入の工夫(サイコロQ&A)と短冊作文でモニタリング |
| B (担当：佐藤) | <ul style="list-style-type: none"> ・創作アフレコを用いた学習活動(小6単元「鳥獣戯画」) ・本文の内容に沿ったクイズオリエンテーリングの指導法 ・ビブリオバトル(書評合戦)の実践方法 |
| C (担当：長本) | <ul style="list-style-type: none"> ・リレー作文の形式やワークシートを活用した作文指導 ・「紙芝居型」本文を用いた文章構成理解の指導法 |

長本 実際にそうやってアレンジを
していくことは大変なのですが、
「大変でもやってみよう」とい
う先生は本当に偉いと思います。

佐々木 ワークショップで学んだア
クティビティーや他の学年の研究
授業を、自分の担当学年の指導に
どうやって生かせるか、どこを使
えるかを考えていくことは大切で
すね。

長本 紹介したアクティビティーを
活用してもらうためには、「前の
学年で何をやってきたのか？」も
大切だと思います。ダラス補習授
業校でいえば、昨年のAG5の小
四の授業でスピーチ活動に慣れて
いる子どもたちを受け持つとす
ると、既に身に付けたスピーチ力
ベースにして、更にその力を発展
させることができます。

バーバー 教科書も学年ごとにそう
やって段階を追っているのです、そ
れぞれの学年に合ったアクティビ
ティーを探していただけるとうれ
しいですね。

佐藤 そうやってアンテナを張りな
がら、ワークショップなどの研究
会に参加していただけると、収穫
が多いと思います。

バーバー 今までは授業見学の校内
研究はありましたが、その時には
見学のポイントや学んだことを自
分はどう取り入れたら良いかが分

からず、あまり研究の成果が広が
りませんでした。今回はフアシリ
テーターとしてワークショップを
しましたが、他の先生方の反応を
見ながら意見を聞くことができた
ので、自分にとっても実りの多い
研究となりました。

佐々木 学年によって異なる到達目
標があります。紹介した活動のア
イデアを違う学年で使った時には
「その学年の子どもたちを対象と
してどこまでできたか」などのフ
ィードバックをいただけると、今
後の参考になりますね。

**昨年今年と、ダラスで合同研究
会を実施してみよう**

佐々木 今回やってみて一番有益だ
ったと思うのは、先生方に「こん
なやり方があるんだ」と、新しい
指導の方法があることに気づいて
もらえたことですね。私も日本で
長いこと教壇に立つてきましたが、
今、こうしてAG5の研究活動に
携わってみると、自分自身も遅れ
ていると感じています。特にダラ
ス補習授業校を考えた時に、昔は
このような研修会がなかったので、
先生方が学びたくても学べる機会
がない状況でした。それに補習授
業校に勤務する先生の中には、平
日に仕事を持っている方も多いの
で、そういった指導法を勉強する

時間をなかなか取れないのも事実
です。そうやって考えると、今や
っている研究は自分たちが受けて
きた教育以外の新しいスタイルを
知る良い機会だと思います。これ
からは、子どもたち自身が「自分
で考える力」を養っていかける授業
を実践していくことが大切です。

バーバー 私は二年前にダラス補習
授業校でAG5の取り組みが始ま
った時から研究授業に携わってい
ます。その時からずっと小四の指
導をしているので、三年目の今年
は子どもが主体的に学べる授業ス
タイルを取り入れることに慣れて
きて、楽に進められています。新
しい指導法に挑戦する時は、最初
の一步が大変ですが、それを繰り返
返して経験を積んでくると、新し
い指導の仕方の下地ができてきま
す。

佐々木 特に今年八月の合同研究会
では、テレビ会議システムのほか
でより多くの先生方が公開授業
や研究会に参加してくれるように
なりました。これは今年の大きな
収穫のひとつです。

バーバー いろいろな地域からの先
生方がいらしていました。ダラス
補習授業校の先生も多く参加して
いて、この研究会をきっかけにお
互いが仲良くなることができました。

佐藤 そうですね、一度、直接お互
いの顔を見て話せる機会があると、
その後がメールやWEB会議など
でつながりやすいですね。教えて
いる学校は違っても、補習校の教
員として同じような悩みを抱えな
がら、それでもがんばっている
というのが分かり、親近感がわか
りますね。

佐々木 確かに、この研究会がきっ
かけで、その後、メールでのやり
取りができるようになった先生方
もいらっしやいます。

バーバー 研究会に参加した後に、
「じゃあ、私もやってみよう」と
とAG5の研究授業と同じ授業活
動案で授業をやってくれている先
生方もいらっしやいますね。先日、
小四のWEB学年会にミネアポリ
ス補習授業校の先生が参加されて、
その後、授業実践までしてくださ
いました。また、WEB学年会で
検討した授業活動案を先に自分の
学校で実践してフィードバックし
てくださった方もいました。

長本 いろいろな学校の先生方が実
施した学習活動案やちよつと手直
しをしたワークシートなどを寄せ
ていただいて、AG5のサイトで
公開してもらえると、私たちも勉
強になりますね。

ダラス補習授業校でAG5が始まってからの一年半を振り返って

長本 子どもが「お客さん」になつてしまふような「受け身の授業参加」が減りました。今は、「学びの意欲」を持って、積極的に授業に取り組むようになりましたね。

佐藤 私が去年担当した小六の保護者の皆さんからは、「日本の学校でも受けられないような新しいスタイルの授業を補習校で受けることができて幸せです」とか「会社で必要とされているプレゼンテーションの力が身に付く授業で素晴らしいと思います。日本人はそういう分野が苦手なことが多いと、会社勤めしていると分かるので、子どもたちでもこんなにちゃんとグループ活動ができると分かり感心しました」など、とても好意的なフィードバックをいただきました。

長本 私も、思っていた以上に保護者の協力がすごいことを感じました。宿題のワークシートの手伝いや単元の成果発表会を見に来てくれるなど、多くの協力をいただきました。そうやって子どもたちの学習に関わってもらえた分、保護者の皆さんが「どうやって我が子に勉強させたら良いのか？」というところが、以前より明確になつてきている印象があります。

バーバー まさに「家庭で親も子ども燃える」状況ですね。親御さんの協力が得られて、とても良いですね。

長本 今年、担当した小三のAG5の授業でも、「いつもの作文より楽しかった」という声が多かったですね。

佐々木 今までのように「はい、書きなさい」という授業でなくて、子どもたち自らが「どうやって書くのかな？」と考えるステップを踏み、その後を書く段階へ進んだのが良かったのではないのでしょうか。

長本 子どもたちが考えてブレインストーミングでしっかりと話した後に書くので、「スラスラ」としゃべるように書く作文」になって、「目的に応じた構成・表現」で書ける子が増えてきました。子どもたちが常に動かないといけないので、普段から気を抜けない授業になつてきました。

佐々木 日本語力に課題があり、今まで「お客さん」になりがちだった子どもたちが、今行っているグループでのブレインストーミングなどの場面では、自分の日本語力に応じた話し方で参加ができるということが分かってきています。

長本 単元終了後の自己評価シートを見ると、「できた」の欄に○が増

えているので、達成感が高まった子どもたちが増えてきたのが分かります。子どもたちの学びの姿勢も授業のスタイルも変わってきました。

佐藤 補習授業校の授業日は年間であつた四十日しかないのに、一時間一時間の授業のクオリティを上げて、がんばって登校して来ている子どもたちの力をつけてあげたいですね。

長本 日本だと学校でドリルもやる時間があります。しかし、補習校ではそれらはすべて宿題になります。補習校の授業では、学校でできないことをよく考えてやらせたいと思います。

佐藤 ダラス補習授業校内では従来の「先生が教えるスタイルの授業」ではなく、「何を子どもたちにさせるのか？」や「子どもたちが何をできるようにするのか？」の「子ども主体の授業」が広まってきていますね。

今後、補習校同士でどのようにつながっていききたいか

佐々木 例えば、土曜日放課後にダラス補習授業校の校内研究会を行つて、それらを他校の先生方へWEB中継できたら、他校からも自由に参加してもらえて良いと思います。今は、ダラス補習授業校だ

けでやっている校内研究会ですが、そこに良い意味での「横入り」な感じで他校の先生方にも参加してもらおうイメージです。

バーバー そういうWEB研究会を、新しい単元指導に入る前にやって、いろいろな先生方から指導法について意見を出してもらうのも良いですね。

佐藤 確かに、授業後の放課後の時間を活用して、他校からもWEBで参加できる先生方に入ってもらふようにすると、遠隔地の補習校間でもつながっていきそうですね。自分ひとり新しい単元の教え方を悩むよりも、校内や他校の先生方とアイデアを出し合うことで、より豊かな授業活動案を作ることができそうですね。

佐々木 振り返ってみると、今のようなWEB会議の形式で、会議や授業を見たりすることに関して抵抗が少なくなってきたのは、今年八月の合同研究会がきっかけでしたね。そこがいわゆるターニングポイントだった気がします。

バーバー そうですね、WEB会議を重ねることに参加してくださる先生方の数が増えていてうれしいですね。補習校の先生方の結びつきが広がっています。WEB会議でお互いの顔を見られるのも、同志としての親近感が増していく理

由のひとつです。

佐々木 今年の十月、低学年の学年研究会での公開授業を初めてWEBで中継した際もとても好評でした。きつと「へえ、こんな授業をしているんだ」という臨場感があつて良かったのだと思います。八月の合同研究会へ会場参加やWEB参加してもらえたのがきっかけで、これだけの先生方に関心を持ってもらえるようになりました。

長本 そう思っていただけならば、つたない授業でしたが、公開してよかったです。

佐藤 やはり「実際の授業」を見られることは刺激にもなるし、学べるところが大きいにあります。普段の補習校ではとにかく自分の授業をすることに忙しくて、校内でも他の先生方の授業を見学できる機会とはほとんどありません。

長本 これからは、アメリカだけでなく他の地域でも授業公開があれば、ぜひ見せていただきたいと思っています。そうすると、どんどん補習校の輪が広がっていきます。

全員 一昔前なんて、こんな交流の仕方は考えられなかったですよ。一方通行でなく、双方向の交流をしたいですね。「公開授業→授業のフィードバック→授業者はそれを知る→そして更に効果的な活動案をまた考える」という流れがで

きると良いです。他校の先生方からも指導の事例を紹介してもらい、ダラス補習授業校の実践と合わせ、倍にもその倍にもアイデアがふくらんでいきます。交流がどんどん活発になっていくのが楽しみです！

最後に

現在もダラス補習授業では、さまざまな学年において研究授業が行われています。補習校ならではの授業スタイルを工夫し続けることにより、それぞれの子もまた目指す目標に少しでも近づけるように努力を続けていきます。

今後、本校での研究授業での成果を世界中の補習校の先生方と共有することにより、先生方にとっても、子どもたちにとっても「お互いに支え合える」補習校ネットワークを広げていければと思います。時間と場所を超えて、補習校同士でつながっていきましょう！

* * * * *

◆研究会に参加した先生方の声 ワークシヨップ

・実際の授業と同じスタイルでやっていたとき、子どもの立場になって考えることができた。サイコロゲームや短冊は楽しかったので、自分の授業でも使ってみよう。

・AG5授業を実際にやってみて、子どもたちの気持ちがよく分かった。

・普段子どもたちがどんな気持ちで授業に臨んでいるのかを考えることができた。

・物語を再生する力、説明する力がつくことを、自分が体験して実感できて良かった。

・自分では考えもつかないような方法や実践の方法を聞くことができ、とてもためになった。

・学年をまたがって使用できる方法もたくさんあり、今後の活動に生かしたいと思った。

・実践を詳しく教えていただき、やる気がわいてきた。

・ワークシートやアイテム、または指導法が新学期からすぐに活用できるものばかりだった。

〈懇談会〉

・中学校の話し合いで、他校の様子を知ることができた。

・今回、各国や各州からの先生方の話を聞き、アイデアの共有ができたことをうれしく思った。これからも定期的に、このような場を作っていたきたい。

・他校の先生方やダラス補習授業校の先輩先生方から、いろいろな話を聞くことができ、自分の学級経営に生かすことができると思った。

・意見やアイデアを交換でき、とても参考になった。

・正直な悩みを出し合い、うまくいった例を共有できたので良かった。

・参加される先生方の人数が増えてきて、話し合いも活発になり良いと思った。

・全体的に素晴らしい研究会で、毎回参加の先生方が増えているのでうれしい。

・補習校教員の授業実践を通しての交流は、学ぶことが多くとても良いと思うので、来年も行って欲しい。

・研究会のこの場の雰囲気、ぜひ世界中の補習校へ広げられたらと思う。

・このような研究会はとても勉強になるし、モチベーションも上がると思った。

・AG5のワークシヨップをローカルなレベルでやって欲しい。

・ダラス補習授業校の授業実践は、それぞれの補習校の実態に合わせて調節しながら活用できるものなので、多くの補習校に広めたい内容だと思った。

・教材や学習活動の内容を今後も広めてもらいたい。AG5の活動を知らない先生方がまだまだ大勢いる。

・WEB参加が可能な研究会は、いろいろな地域の先生方との交流を可能にするので、今後も続けてもらいたい。

エー
A
ジー
G
ファイブ
5
だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

青島日本人学校と大連日本人学校の取り組み

青島日本人学校校長 金森孝子
大連日本人学校 教員一同

金森孝子氏

青島日本人学校は、今年度から中期目標を「多様性を理解し、自他を尊重しながら切磋琢磨する児童生徒の育成」と改定し、グローバル人材、特にバイカルチュラル人材の育成を要としてその具現化に努めています。また、AG5の取り組みを開始し、台湾3校の実践を参考にしながら、日本語指導のプログラム開発を行うことになりました。

大連日本人学校は、「劇的に変化する国際社会の中で、生涯にわたって自身の良さを生き生きと発揮できる子どもの育成」というテーマを設定し、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発と、そのための教員研修のプログラム開発に取り組みました。



大連日本人学校 職員一同

青島日本人学校における日本語指導

学校の願い

(1) 児童生徒の実態 本校は青島日本人会が運営する創立十六周年を迎えた学校です。児童生徒は、四割以上が多文化家庭です。その特徴を強みとして、お互いが切磋琢磨できるような中国語にも日本語にも力を入れています。日本語指導は、必要な児童生徒の個別指導を三年間実施しています。しかしその内容については担当が日々模索しており、質の高い指導で一人一人の力を伸ばしていきたい、カリキュラムを構築していきたいという願いをもっていました。また青島には、就学前の幼児を日本語で保育する施設がなく、言語の習得の著しい幼児期を中国語等で過ごしてきている児童が多いことも、日本語指導が必要要因になっています。入学する多くの児童は中国語に慣れ親しんできていますが、多文化家庭では十分に日本語に触れることなく幼児期を過ごしています。学校には入学が可能かについての相談が多く寄せられています。

(2) 在留邦人の減少 現在青島は、在留邦人が一七〇〇人前後で、毎年減少傾向にあります。在留邦人の減少は学校の経営に大きく影響します。減少の要因の一つとして、日系企業が日本人を長期間、派遣するスタイルから、現地の方を管理職とする経営にシフトしていることが挙げられます。本校の児童生徒数は平成二十三年の一一八名をピークに減少し、平成二十七年には七十名を切りました。日本語指導は在籍数が減少し続ける状況を変える手段としても実施せざるを得なかったのです。児童生徒、保護者に選ばれる学校づくりを目指したのです。現在、小学部六十五名・中学部十六名の八十一名の在籍を確保することができています。しかしながら在留邦人の減少は今後も続く見込みで、樂觀視できない状況が続くと思われまます。

日本語指導の実際

日本語指導は、「個別指導」と「課外授業（日本語教室）」を中心に行っています。二期からは、AG5委員の先生方の助言により、教科の基礎基本の定着が図られるよう、在籍学級と日本語教室の指導を関連させた教科指導にも取り組み、効果を上げています。

(1) 個別指導 在籍教室とは別にいう個別指導は、日本語指導が必要な児童生徒の保護者との連携を密に、



日本語指導担当の岡本教諭による日本語教室での補充、先行授業

時間や回数、担当などを確認しながら実施しています。学年や実態に応じて、日本語指導担当教員と担任が相談しながら、指導を継続できるように調整し、今後の進路選択について共有しながら、ニーズや実態に応じて指導内容を工夫しています。

(2) 課外授業（小学部一年の日本語教室） 今年度から課外授業として小学部一年生対象の日本語教室を新設し、週一回四十五分の指導を行っています。日本語の理解が不十分と把握した複数の新入生に対し、入学前に保護者と面談し、入学後の早い段階で日本語学習に取り組みめるようにしました。

第一回の日本語教室は入学してから一週間後に実施。金曜日六校時、小学部低学年の下校後の学習になるので、集中力が続くか心配しましたが、開始当初から意欲的に取り組む姿が見られました。「みずがのみた

いのです。」「といれにいつてもいいですか。」の復唱で発音を確認したり、「すきなものはなんですか。」の問答を行ったりして、学校生活にかかわる言葉や文を用いて学習を進めました。学びを重なるにつれ、日本語への興味も増し、「わたし、日本語だすき。」と話す児童も見られるようになりました。三か月を過ぎたころ、児童の日本語力は飛躍的に伸びてきました。学習してきた言葉と文、そして自分の伝えたい気持ちやびつたりと一致するようになってきたことで、自信をもって積極的に学習したり活動したりする様子が増えてきました。

数え方、読み方、書き方、構成についての理解です。一人一人の理解を確実にするために在籍学級の学習を捕う取り組みをしました。在籍学級では十のまとまりをつくるのが難しくそうだったので、日本語教室では一人一人に数を唱えさせたり十のまとまりを説明させたりしながら答えを導きだしていきました。在籍学級でも有効だったカードを用いることで作業のつまずきもなくなり、教科書以外の問題にも進んで取り組んでいました。在籍学級の学習を日本語教室で補充することで、着実に目標の達成が図られる形になりました。

はじめに
大連日本人学校は、児童生徒の約半数が国際結婚家庭で、両親のどちらかが中国出身の方という場合が多く、互いに認め合い支え合う雰囲気にあふれています。

この特性を生かし、本校では、日本と中国の文化・価値観の違いを捉え、自分の生き方を確立し、生涯にわたってその良さを発揮し続ける子どもの育成を目指して、教育活動を進めています。

りました。
しかし教師を対象としたアンケートや全体研修からは、「授業で理解できる語彙が少なく感じる」「一度では指示を理解(聞き取る)ことができない児童生徒がいる」「上手に考えや思いを伝えられない場面が見られる」という例が報告されました。その一方で、「日本語力も中国語力も高い児童生徒も多い」というプラスの面も挙げられていました。

この実態を踏まえ、日本語の学習言語能力を向上させる学習活動を工夫するとともに、日中のバイリンガルの強みを生かすこともできる実践を目指すことにしました。

で補充、先行して指導

○国語科単元「じどう車くらべ」

在籍学級では、説明文を読んで構造や内容を把握するという単元目標を達成するために、「じどう車ずかん」づくり」という言語活動を中心に学習を展開していました。そこで、日本語教室では図書資料から車を選び、在籍学級より先行して学習することになりました。児童は日本語教室で学んだことをもとに、在籍学級で自信をもって説明文を書き、振り返りカードに◎をつけていました。

○算数科単元「おおきいかず」

主な単元目標は二位数についての



iPadで楽しみながら数を学ぶ様子

今後も

AG5への参加をチャンスととらえ、学校経営や指導面で成果が得られるようにAG5運営指導委員会の先生方や関係校と共に、日本語指導を推進していきたいと考えています。

大連日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成

はじめに

大連日本人学校は、児童生徒の約半数が国際結婚家庭で、両親のどちらかが中国出身の方という場合が多く、互いに認め合い支え合う雰囲気にあふれています。

この特性を生かし、本校では、日本と中国の文化・価値観の違いを捉え、自分の生き方を確立し、生涯にわたってその良さを発揮し続ける子どもの育成を目指して、教育活動を進めています。

児童生徒の実態

(1) 言語能力

日本語力が十分でないために学校生活に支障が出ている児童生徒はごく少数ですが、学習場面でのつまずきが課題となっています。

実際に全校の児童生徒を対象に「DLA(はじめの一步)」の「語彙チェック」を実施した結果、小学部一年生は八五%、小学部二〜四年生は九五%を超える正答率、小学部五年生以上はほぼ一〇〇%に近い正答率となり、日本語の語彙は学年が上がるごとに高まっていることが分かる

(2) 児童生徒の意識

児童生徒の意識についてアンケートを実施しました。その結果、次のような傾向が見られました。

- ・小学部低く中学年では成功体験が乏しいなどの理由により、うまくいかないと感じる。
- ・小学部中学年から学齢が高くなるにつれ、「表現・コミュニケーション」に対する苦手意識が高くなる。
- ・小学部中学年以上は、あきらめずに挑戦ができるたくましさや身につけていくものの、嫌なことを外に出さず自分の内面に秘めてしまう。そのため、自尊心や表現意欲を高める

る実践が必要だと考えました。

(3) 授業実践

児童生徒の実態を踏まえ、「在籍学級における日本語支援」「日本語で考えや思いを適切に伝える表現力の育成」「自尊感情の伸長」という視点から授業づくりをすることにしました。

○在籍学級における日本語支援

小学部一年における実践(単元名「くらべてよもう」教材名「じどう車くらべ」授業者・赤地由衣)の事例を報告します。

「『じごと』と『つくり』を捉えて書く」という国語科の目標と、「どんなクルマですか。」などの問いかけの言葉を使って話し合うという日本語の目標を設定しました。

はじめに児童は、はしご車の動画を見て、その「つくり」を付箋に書きました。それを活用して友人との共通点や相違点について話し合い、読み取りを深めていました。この「付箋に書く」というスモールステップを入れることで、日本語支援が必要な児童も自信を持って発表することができました。

また、読み取ったことを話し合ったり、ワークシートの表記を確かめ合ったりする活動では、「どんなしごとをしていますか。」「どんなつくりになっていますか。」「わたしもおな



小1 国語の授業でのペア学習
「同じところと違うところ」

じです。」などのモデル文を提示しました。これらのモデル文をたよりに、日本語で考えたことを伝え合う活動にも楽しそうに参加していました。

どの児童もこの活動を通して仕上げた「じどう車ずかん」を手に、誇らしげな笑顔を輝かせていました。

○日本語で考えや思いを適切に伝える表現力の育成

小学部四年(授業者・佐藤静子)では、リーフレットの作成をゴールとした授業実践をしました。

色分けしたカードを使って自分の意見や立場をはっきりと表現することにより、日本語支援が必要な児童生徒も分かりやすくなり、話し合い活動に参加することができました。

また、小学部六年(授業者・馬淵奈央人)では、「資源を大切に、よりよい未来にするために自分たちができること」というテーマについて、

節約・節電・節水・開発のキーワードを提示してグループピングや役割分担をした上で、自分達との相違点や類似点について色画用紙も活用して話し合い活動を充実させました。

中学部一年(授業者・北村雅俊)

では、総合的な学習の時間に「職業調べ・職場体験や中国と日本の働き方の比較を通して、自己の生き方を考える」というテーマに取り組みました。この学級は、五名のうち三名が国際結婚家庭であり、の中には日本語の学習言語能力に課題がある生徒もいます。

学習言語能力に課題がある生徒も、自分と関わりがある現地企業の「キヤノン大連」や「広タオル」の方々の講話から、自ら考え挑戦することや協調性の大切さを学びました。

この学びを生かして「好きなことに打ち込んで、楽しく豊かな人生を送る」という自身の理想とする生き方について、見事にPPTにまとめ発表することができました。

在大連の日本企業の方々からお話を聞いたり、日本と中国の文化・価値観の違いを考えたりすることを通して、特に国際結婚家庭の三名の生徒は、日本と中国の両方の良さを理解していることに自信を深めた様子が見られました。

(4) 自尊感情の伸長

小学部中学年以降に見られる「嫌なことを外に出さず自分の内面に秘めてしまう」という課題を克服するため、私達は「自分の考えや思いを適切に伝え、より良い人間関係を築く力」が、生涯にわたって良さを発揮することにつながると考えました。

そこで、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルのトレーニングを基盤とする「ピア・サポート(プログラム)」の活動を取り入れることにしました。中学部の特別活動では、実際にプラスのストロークの実践を行い、ほめることの難しさや大切さを学ばせることができました。

今後に向けて

視覚教材等を活用したり教師の指示や学習の留意点等を視覚化したりして、子どもの学習内容の理解を深める支援(理解支援)や、子どもの思考、感情、立場などを視覚化することによる交流活動や対話への支援(表現支援)をより一層充実させたいと考えています。

さらに、道徳の時間・特別活動も充実・工夫させて、自尊感情や表現意欲を高め、より良い人間関係を築けるような学習活動を追究していきたいと思えます。

エー A ジー G ファイブ 5 だよ

シリーズ 24

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業



世界で活躍できる子供たちのために

日仏文化学院 パリ日本人学校 校長 小野江 隆

AG5運営指導委員会から「香港日本人学校におけるグローバル人材育成のための探究型学習にかかわるプログラムをヨーロッパ・パリにおいて展開してみませんか」とのお話をいただきました。高度グローバル人材拠点事業では、海外で学ぶ児童生徒がグローバル人材として育つ支援をしています。

パリ日本人学校は、AG5の支援を仰ぎながら実効力のある研究を進めていくことが、今通う子供たちの未来に大きく貢献するのではないかと考え、世界に輝くグローバル人材の育成に向けて学校をあげて取り組んでいます。

AG5とパリ日本人学校

香港日本人学校で行われた「グローバルクラス」の実践をパリならではの新しい取り組みとして横展開させるのは可能だと考えました。

その理由は、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的な深い学び」「社会に開かれた教育課程」の実施が、本校において、すでに推進されているからです。さらに、こうした基盤の上にパリならではの視点を加えてグローバルな人材を育成していくことは、日本人学校としてのアイデンティティや独自性を打ち出し、これからの日本人学校の在り方に少しでも貢献できるかもしれないという思いもありました。

研究は、教員が行っていくものですが、まず一人ひとりの教師力と全員参加こそが原動力になります。本校には、それがあつたことが本プロジェクト研究を推進させていく上で大きな礎となりました。

AG5を進めるにあたって

探究型学習の実践は、新学習指導要領が目指すものと同様であり、本プロジェクトへの取り組みは新学習指導要領の実践と同じ方向性にあります。一人ひとりの教員が単元開発、授業改善、カリキュラム作成を

行い、マネジメントすることで、グローバル人材育成のための総括的な取り組みになると考えました。

また、派遣教員にとっては現地の実情を知り、国際人・グローバル人材を育成する教員としての力を身に付けることになり、帰国後の国内におけるグローバル教育の中核となる教員の養成にもなります。そうした教員のモチベーションを高めるのは、他でもない本校の子供たちです。

七月には本プロジェクトを始めるにあたり、海外子女教育振興財団の中村雅治理事長、AG5運営指導委員会の佐藤郡衛委員長に今後についてご指導いただきました。八・九月には本校の研究推進委員の水野団教諭がアオバジャパンインターナショナルスクール、東京学芸大学附属大泉小学校等を視察して方向性を学びました。十二月にはアオバジャパンの小澤大心先生をお招きし、IB(国際バカロレア)のPYP(初等教育プログラム)についてご指導いただいたほか、二月には本校の研究推進委員長である袴塚正之教諭が東京学芸大学附属大泉小学校の発表会に参加し、探究について学びました。

初年度の研究・キックオフ

今年度の研究の大きな柱は、次の

四つです。

①本校におけるグローバル人材育成に必要な資質・能力。②探究単元の開発推進のための対話的で深い学びの実現と学級づくり。③単元づくり(探究単元)のためのカリキュラムマネジメント。④汎用性のある小中一貫探究単元の開発(IBの理念を参考)。

まず、総合の時間から探究の時間を生み出し、他教科・行事等との関連性を明らかにするため、教科横断を意識したカリキュラム作成に着手しました。

①についてはIBの視点を組み込むことにしました(文科省のIBコンソーシアム協力校として支援をいただきました)。

②については、岡健教頭を中心としたICT教育の積極的な推進を図り、タブレットや書画カメラ、プロジェクトを活用し、授業効率を高めたほか、様々な授業スタイルを可能にしました。協働的な学びを可能にし、発表の機会を増やすことができました。

③については、すでに学校で実施してきた様々な行事等を効果的に配列し、探究型学習を生み出すための時数や関連性を持たせる工夫が大切になりました。同時にアウトリーチ

を意識し、パリ市やモンテニール市とのコラボを実現することで、人材確保、人脈の新たな構築が可能となりました。年間のカリキュラムを「グローバル人材育成」の視点で俯瞰でき、力が大切になるのです。

④は一番の課題です。小学部では「水プロジェクト」を始めることにしましたが、このきっかけとなったのは二〇一八年に来校された皇太子（当時）が四年生に「水」に関する話をされ、子供たちが深く関心を抱いたことです。

また中学部では生き方やキャリア教育を視野に、「フランスと私」をテーマに取り組むことにしました。

研究のスタート

校内研究を基盤に研究主題を「世界で活躍するグローバル人材の育成」と設定しました。

〈理由〉

一 日本人学校・補習校に通う児童生徒はグローバル人材育成のための教育の最前線にいる。

二 探究型学習を推進し、海外ならではの本校の研究を発信する。

三 グローバル人材育成のための研修を深め、帰国後は国内の同教育の中核となる教員を育成する。

〈概要〉

研究Ⅰ（日々の授業改革）

探究の学習がスムーズに進むよう児童生徒の資質・能力を高めるために、昨年の授業改善の研究を継続し、今年度は具体的に「わけをそえて話すことができる子供」を育む授業づくり・改善に取り組む。

研究Ⅱ

授業や学校行事・校外学習・社会見学・施設見学などを「B」の観点で考察する（配列、時期、意義等）。

研究Ⅲ

探究型学習活動では総合的学習の時間を核に深い学びを実現させる。

探究単元の開発に向けて

〈小学部「水プロジェクト」実践〉

一 全学年において一人ひとりがウェビングマップ（イメージマップ）を教師の指導のもと作りました。

小一・二年生は生活科の時間に身近な水環境に関心を持つためにフィールドワークを行い、水辺の生き物とのふれあいを通して、水生活に関心を持ちました。また、「水ちようさたい」を結成し、日常の生活を「水」を視点に調査することで、水の役割や存在に気付くことができました。

二 協働的な学びの中で、クラスの課題として共有するためカテコリ

一 分けをしました。

三 自分の課題を設定（三〜六年生）。たとえば、

- ・水の循環の仕組み
- ・ヴェルサイユ宮殿に水を引くにはどうしたらいい？
- ・軟水と硬水の違い、味やでき方
- ・泥水を飲まなきゃいけない国はどうしてあるの？

四 自分の課題について、夏休み中にフィールドワーク・調べ学習（自由課題研究）を実施しました。

五 調べ学習でわかったことや新たに生まれた課題を整理しました。

六 調べて探究したことをパワーポイントにまとめ、考察を加えた発表づくりの準備をしました。

七 六年生は、パワーポイントの発表に加え、水をテーマに自分の考えや思いを提言するために、ポーンピドゥーセンターの現代アート見学と講習を経て、自己表現方法を学びました。その学習を経て、自己アピール作品に取り組み、アートの表現をするという新たな探究の形を模索しました。



軟水と硬水



水と循環



2学期



1学期



協力して、発表するための資料作り



意見を交換し、考えを深めていく

調査・探求の成果。子供たちの頑張りややる気がひと目でわかります。この掲示で、さらにモチベーションをアップ！

○体験学習との関連性

子供たちは「水とわたし」を探ることで様々な機関が各役割を果たしていることに気付いていきました。

五年生はOECDの見学を行いました。事前担当官に学校で取り組む「水」の課題と連携した内容に触れていただくようお願いしました。子供たちの飲み水への関心や課題は水道の供給について世界で議論されている事実を知ることになりました。六年生はユネスコを見学、災害にユネスコが大きくかわり提言していることを知ったほか、水被害や社会の歴史についても触れることができました。

○発表

学級内での発表だけでなく、共通のテーマで隣接学年同士の発表が行われた児童にとつては、大きな刺激となりました。六年生は発表方法を自ら決め、学習計画を立てました。探究につなげるために、学習方法や解決方法、発表方法や提示方法など子供たちで自己演出のアイデアを出し合い、ゴールを見据え、最も効果的な方法を考えました。

〈中学部「フランスと私」卒論発表会〜実践〉

中学部では、小学部で身に付けた力とフランスで生活していることを



二 学びの視点は次の二つです。

「フランスに生きる」

・日常生活や学校生活での気付き

・宿泊学習や体験学習等の経験

・日本や他国との比較

「自分らしく生きる」

・これまでの自分の成長、経験

・フランス社会に生きる今の自分の役割の意識

・集団における自分の役割の意識

（各教科、行事等と結び付けて「自己の生き方について考えを深めていく」ための教育活動を展開）。

三 キャリア教育を意識しました。

キャリアとは、生涯の中で自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねのことです。中学生にとつて、今の自分の役割を意識し、それを果たしながら生活することが社会と

かかわることになり、そのかわり方の人との違いが「自分らしい生き方」になっていくのでしょうか。

多感な時期にフランスで生活して

いること、その中で経験する様々な立場や役割を十分意識できるようにしたいと考えました。

四 個々にテーマを設定。たとえば、フランスの「食」「働き方」「交通」「歴史と問題点」「ペット事情」など。

次年度に向けて

調べ学習や課題の共有の過程から探究への道筋（フレームワーク等）を含め、一年間のゴールをしつかりと見据えていきたいと思えます。

今後は、校内における発表の機会を補習校や現地校（日本語クラス）または近隣の日本人学校へ広げ、ネット会議等を利用し、交流や共同で課題解決（グローバルスクエア）の機会を持ちたいと考えています。



中学部卒論発表会、小学6年生も参観

〒105-0002

東京都港区愛宕1-3-4 愛宕東洋ビル 6階

公益財団法人 海外子女教育振興財団

事業部 教育企画・教育相談チーム

TEL : 03-4330-1352

FAX : 03-4330-1355

E-mail : ag5@joes.or.jp

URL : <https://www.joes.or.jp>



海外子女教育雑誌

海外子女教育 4

2017.10.31

特集1
我が社の
グローバル人材

特集2
異文化環境での
幼児保育

今月の巻頭
藤岡三郎さん
「mommy talk」

海外女子校
神戸女子師範中学校高等学校

海外の学校
プエルトリケス日本人学校
メキシコ州自治体事務
コルテス・モリソン学校
珠海補習授業校

